

創価学園・創価大学と創立者（第1回）

神 立 孝 一

「創価学園・創価大学と創立者」というテーマで話をさせて頂こうと思っております。この広い池田講堂でやる必要はないのではないか、というふうにみなさんもお考えだとは思いますが。普段は演壇があってですね、演壇の上から講義をさせていただいているんですが、今日はオーケストラボックスをあげていただいて、みなさんと接近する形で講義をすることになりました。私としては非常に有難い感じでございます。なおかつ今日はのんびりと一日聞いていただくということで、大学の講義と言うよりも、我が家に来ていただいてお茶を飲みながら、ゆっくりと懇談をするという形で、お話を進めさせて頂きたいと思っております。言うまでもなく、わが家はこんなに広い家ではないんですけどもね。

今日のテーマですが、ほとんど私の思い出話に近いようなかたちで、何か自分の過去を自分でほじくり出してみなさんの前にお見せするということで、非常に恥ずかしい思いがいたします。

さて、本学が開学したのは、1971年なんですね。それで2021年にちょうど開学50周年を迎えることになります。今、日本全国の様々な私立大学が、自分たちの大学はどういう特色があるのか、自分たちの大学は何を目的につくられたのか、そういうことも含めまして、多くの国民の方々にきちんと説明をしなければいけない。なぜならば、私立大学も国家の援助をうけて国民の税金を頂きながら、それで教育に取り組んでいるわけですので、その説明責任を果たす。そういう意味で学校の歴史を残す。いわゆる「大学史」をつくっています。私立大学で、一番長い歴史を有するのは慶応大学で、開学150年史をつくっています。本学でも開学50年を目指して50年史をつくらうということで、昨年、創価教育研究所を中心に編纂委員会と編集委員会が立ちあがりました。大学の歴史を残していこうという事業がはじまりました。その中で私たちは、1971年に大学が出来たので、そこから順番に大学の歴史を書いていけばいいと通常であれば考えるところですが、皆さんご存じのように、それだけではとても私たちの大学の歴史を全てを語ることにはなりません。当然、創立者池田先生の師匠である戸田先生、それから牧口先生。こういう先生方のところから、歴史を書き始めた方がいいのではないか。また、書き始めるべきなのではないかということで、これまでの研究を生かしつつ、今準備を進めているところなんです。その中で、ひとつは創価大学ができる前に創価学園ができてますので、このことをまずきちんと押さえようではないか。そのために、僕が知ってることは語ったり書いたり残すべきなのではないか、と所員の先生

Koichi Kandachi（創価教育研究所長）

*この講演は、2009年8月28日に開催された「第37回夏季大学講座」での「創価学園・創価大学と創立者」を、加筆・訂正したものである。

方から指摘を受けました。その一環として、自分なりの研究成果をみなさんにお聞きいただこうと思った次第です。まだ中間報告的なんです、そのお話を聞いて頂こうと思っています。

ヨーロッパの研究者の話はジョークから、日本の研究者の話は言い訳から始まるというのが常道らしいんですけども、私も日本の研究者として言い訳から入りますが、今日皆さんのお手元に配らせて頂きました講義予定はですね、創価学園の開学から大学の草創期の4年間をお話しさせていただこうと思って用意をしたものです。しかしながら、この期間のことをまとめ出したんですが、学園の創立以前のあたりが非常におもしろくてですね。ちょっと時間をつぎ込んで、洗い出そうと思ってやっているうちにですね、どんどんどんどん時間が過ぎてしまいました。すごく面白いんですね。そこで学園の開学の3年間、昭和43年から45年。ワンサイクルですね。高校中学が1年生から3年生で終わるわけですから。そこまでを一つのまとめしようと思ったんですが、そこまでもいかず、わずか半分で終わってしまった。本当に申し訳ないんですが、こういう形で、今日は濃密に一つひとつお話をさせていただいて、続きはまたもし学長のご許可がいただければ来年にまわさせていただこうということで、お話をさせていただきたいと思います。是非とも御了承を頂きたいと思います。

まず、簡単に自己紹介をかねて話を始めさせていただきます。私は先ほどから名前が出てますけど、神立といいます。「神が立つ」と書くんですね。あまり本学にはふさわしくない名前だと批判をいつも頂いているんですが、創価大学4期の卒業でございます。経済学部で「日本経済史」という分野を担当しております。高校は創価高校の4期になります。中学校は1期でございます。なぜ僕がだんだんとのめりこんでいったのかというと、自分たちが歩んできた道をそのまま色々な形で今、振り返ってみるとですね、その時の自分の思いと、それからその時の創立者の思いと、一緒のところもあるし、食い違っているところもあるんですね。食い違っているところはどこかということ、僕らは子どもでしたから。13歳の。それに対して先生が何をどのように望まれておられたのか。そこをふり振り返ってみると、本当に涙が出るほど嬉しい部分と、顔から火が出るほど恥ずかしい部分と、種々雑多ございまして、そういう思いに駆られながら勉強する間にですね、いつの間にか時間が経ってしまったというわけです。今日は赤裸々に全部みなさんにお話をしようと思っておりますが、そういうことで中学・高校・大学と進み、そのまま大学院に残りましたので、大学院のマスター2年間、ドクター3年間、合計で15年間もの長きにわたって創価教育を受けて来たことになります。それで終わるのかなと思っていましたら、大学院を修了してすぐに経済学部の助手ということで、大学に勤務させていただくことになりました。昭和58年、1983年に創価大学に就職させていただきましたので、それから早26年。時の流れというのは本当に早いなと、しみじみ感じております。毎年毎年入ってくる新入生、つまり18・19歳から22歳までの若者とずっと過ごしております、本当に楽しいんですね。普通の僕らくらいの壮年になりますと、若者が何を考えているのかわからない。何をされるのかわからないから怖い、とよくおっしゃるんですが、僕の場合は一緒にいてワイワイみんなにつきあってもらうのがすごく嬉しくてですね、一緒になって勉強したり、色々なところに行ったりして、あっという間に26年間、過ぎてまいりました。その中でですね、創価教育研究所の所長をさせていただくことになり、様々な

形で創価大学の歴史の事を考えるようになりました。それで、明年2010年は『創価教育学体系』発刊80周年なんですね。したがって非常に記念すべき年になると思います。

こうしたことを考えてみますと、創価教育というのはいったい何か。創価教育とは何を指しているのか。どうなっていくことが目標なのか。これらを一回しっかりとまとめておく必要があるだろう、と考えるようになりました。ところが、これらをまとめるということはなかなか至難の技でして、今、中国をはじめとして全世界でいろいろな形で池田先生の研究や、創価教育の研究が行われているんですね。そうした様々なところから、創価教育研究所にたいして色々な問い合わせがございます。その中でもっとも多い問い合わせは一体何かというと、「創価教育というのはいったい何ですか」、「創価教育というのは何を指しているのですか」、「どういうことをすれば創価教育ということになるのですか」。こういった内容がすごく多いんですね。それに対して、みなさん、それぞれ、たとえば創価大学の教員であれば、お一人お一人が自分なりの創価教育観というのは持つてると思うんです。ですからそれを説明をしても、それは確かに間違いじゃない。間違いではないけれども、これでいいのかなという思いもある。したがって、確定する、定義づけをするということはすごく難しいのですが、それでも、それだけは欠くことができない。欠かすことができない、というものがやはりあると思います。それこそは牧口先生、戸田先生が思索され、考え抜かれたものをまとめられたものなのではないかと思われます。それが創立者の池田先生に受け継がれて、実際には、創価教育の実践の場で行われているんだろうと考えざるを得ない。そういう意味で、今、本校のような創価教育の実践の場で、いかなる人間教育がなされたのかを振り返りたい。こう思った次第です。というのは、自分自身もその中を歩んできております。ずっと創価教育の現場を歩いてきましてね、口の悪い友達から言わせると「世間知らずだ」と言うことになる。「君は創価しか知らないだろう」と批判されるのですが、まさにその通りなのですけど、自分としては、「歩く創価教育だ」と勝手に思っているんですが、なかなかそれもきちっとした形で言うわけにもいきません。ただ自分なりにそれを研究していきたいと願ってきました。その作業を通じて、創価教育とは何かを考えてみたい。創価教育とは何かという、本質に迫る一步にしたい。すべてが夏季講座でお話する3時間の間で明確になるということはありませんが、とにかくそれを考えるための一步というのを、今日ここで提示したいと思っています。前置きが長くなりましたが、早速話しを始めたいと思います。

まず、創価学園創立以前ですが、創立者が創価学会の第3代会長に就任された年である昭和35年を、一つの区切れ目にしてみたいと思います。それから43年を次の区切りにしたいと考えています。創価学園、東京・小平市の創価学園ですが、この開学が昭和43年4月8日です。またあとでお話ししますが、この昭和35年から42年、つまり学園がつけられるまでの、開学以前の段階に一体何が、どのようになつていったのか、ということなんです。

まず、学園の創立者である池田先生が、当時の教育の状況についてどのような認識を持たれていたのかということを、先生ご自身が書かれたものの中で、探してみました。

それは、「創価学園の入学式を祝う」という一文で、日付は1968年4月4日。学園の初めての入

学式が4月8日ですので、その4日前に『聖教新聞』紙上に発表されました。その時の模様は、『新・人間革命』の第12巻に書かれているんですが、その「創価学園の入学式を祝う」のなかで、次のようなことを先生は述べられているんですね。

「現今の教育界の実態をみるに、憂うべき事象は余りにも多く、改善を待望する声は、巷に満ちみちている。この悲しむべき現実の底流をなすものは、教育理念の喪失であり、若人の人格を軽視する風潮であり、また、指導者の次代に対する責任感の欠如である」。

こういうふうに書かれているんですね。よく読んでみると、この指摘は、昭和43年になされているんですが、現在の声に全部あてはまってくる指摘なんですね。不思議なもので、その教育というものに対する本質がわかっている人を見ると、やはりこの様になるんですね。今も、この通りだと思います。この中で特に、教育理念がない事が大きな問題です。教育理念というのは、一体何のための教育なのか、どういう教育なのか、何を目指す教育なのか、ということを明示するものでしょう。この教育の理念というものが、まさに教育そのものを導くわけですから。例えば戦前の教育とは一体何だったのかというのは、皆様ご存じのように、これは、牧口先生の人生をずっと辿っていくとわかるんですが、校長先生が朝礼の時に、「この戦時下において男の子たちの目指すべきものは一体何か。それは、天皇陛下のために死んでいくことである。お国のために死んでいくことである。これこそが男子の本懐なんだ」という話を校長先生がしなければならなかった。校長先生がその戦争を押し勧めるような、そういう言い方をしなければならなかった。それは、当時の国家の理念がそこに向いているからで、その国家の理念に基づく公立の学校というのは、当然ながらその理念に従わなければならない。もちろん良心を痛めた校長先生もたくさんいたでしょうけれども、その理念にしたがって、自信を持って子供たちに語っていった校長先生も多かったと思います。教育は、その理念がすべてを決めてしまうと言っても過言ではない。それでは創価教育というのは、一体何を持って理念というのか。これが非常に重要になってくるだろう。ここのところの探求なしに、創価教育を語ることはできない、ということがわかります。それから「若人の人格を軽視する風潮」。これは人類が始まってからずっとあるんですね。「最近の若い者は」という言い方、必ずしますものね。これは、古代エジプトの壁にもそういうことが書かれてあったというくらいで、だいたいの方がおっしゃいますよね。僕が見てても時々わかりないことがあります。かなり若者たちに付き合っているんですけど、よくわからないことがあります。特に子供と若者というのは、無駄な動きが多いんですね。何か無駄なことやっていますよね、何でこんなことやっているのかな、と思ってしまいます。そうは言っているんですけど、「人格を軽視する」というのは一体どのようなことを言うのか。人格を軽視するということは、若者たちの未来を見ていないんだと思うんですね。未来を見つめていない。この子供たちがあと10年経ったらどうなるのか。20年経ったらどうなるのか。こういうことを見ていかないと、おかしいことになる。特にこの昭和43年は、皆さんご存じのように、大学紛争の真ただ中です。大学紛争については、またどこかで必ず、創価大学をつくる時の一つの時代背景として、なぜそ

の時にああいう学生運動が起きたのかということは、研究しなければいけません。話がずれるんですが、今年になって、つい先月ですか、小熊英二さんという社会学者がおりまして、この人が『1968』（新曜社刊、2009年）という本を書いたんですね。それは、上下2巻で、1巻が1000ページもあるようなすごく分厚い本なんです。この本が売れているそうです。

当時の学生運動は一体何だったのか、ということをお熊さんが一生懸命研究しているんですね。僕もやっこの間手に入れたので、今度読んでみなければいけないな、と思っているところです。来年のこの講義で、なんとか反映しないかなと思っているんですが。当時、なぜ若者たちがそのような学生運動を起こしたんだろうか。これは、やはり考えなくてはならない。その最大の理由は、この大人たちの若者たちに対する軽視、大人たちが自分たちの気持ちをわかってくれない、自分たちのことを考えてくれていない、この大人との間の信頼関係のなさ。このあたりに一つは問題があるんだろうなと思います。まだ、もっともっと考えてみなければいけないことで、追及しなければならないんですが、この時に創立者が、この時代状況で憂うべきものは「若人の人格を軽視する風潮である」と明記されています。そうして、もう一つが「指導者の次代に対する責任感の欠如である」。如実ですね、これは。これが未だに続いているということは、一体どうなっているのだらうと思わざるを得ないですけども、それを言っても始まりませんのでね、それは、また色々なところで、もっと別な運動とかですね、別なところで示していくしかないんですが。

さてそこで、創価学園、創価大学の設立構想というものが示されていくわけですが、その設立構想に至るまでの道を、まずはじめに少し辿ってみたいと思います。

昭和25年の11月16日。この日は木曜日で快晴です。なぜ曜日と天気までわかるのかということ、これは、池田先生の『若き日の日記』に書かれているからなんですね。『若き日の日記』にこういう記述がございます。

「昼、戸田先生と、日大の食堂にゆく。

民族論、学会の将来、経済界の動向、大学設立のこと等の、指導を戴く。

思い出の1頁となる」

これが『若き日の日記』の昭和25年11月16日付のところに書かれております。前にも何回か紹介させて頂きましたが、ちょうどこの昭和25年というのは、戸田先生の事業が失敗を致しまして、本当に戸田先生と池田先生が色々な形で苦労をされている真ただ中のことです。この『若き日の日記』を見ますと、前日の15日、前々日の14日ですけども、戸田先生が会社の債権、借金ですね、これが返せなくなりました。そのために、池田先生がその借金をさせて頂いたところへ一軒一軒回ってですね、色々な説明をしている時なんですけども、ちょうど静岡の方へ行かれてですね、そのお仕事をされてきて、14日の夜に熱海に泊まって15日に東京に戻ってくる。このような動きをずっとされている時です。ですからその意味では、この二人が一番大変な時だったと言っていいと思います。その時に、大学の設立等のお二人で話し合われたということ

なんですね。それで僕たちは創価大学で、この「創価教育研究所」の前身になります「創価教育研究センター」をつくって頂いたんですが、そのオープニングも、この昭和25年からちょうど50周年目の、2000年の11月16日にオープンさせて頂きました。

さて次に、昭和33年の4月2日です。これも皆さんご存じのように、第2代会長の戸田城聖先生がご逝去された年です。そしてその2年後、昭和35年5月3日に池田先生が、創価学会の第3代会長にご就任されました。それからほぼ4年後の「第7回創価学会学生部総会」で、創価大学の設置が発表されます。ですからよく考えてみますと、会長に就任されてから短い間で、これだけの構想を練っておられます。したがって、先ほど示しました昭和25年の11月16日。やはりこの段階で、戸田先生から大学の設立の構想を話された時に、池田先生の生命の中に学校をつくるという、そういう灯がともったと言ってもいいと思います。実は、戸田先生が昭和25年に池田先生に大学の設立のことを話されたのですが、牧口先生が戸田先生に学校の設立構想を話されたのは、昭和14年なんです。ちょうど戦時に向かっていく直前くらいですかね。日本全体が戦争に傾きかけていく頃に、牧口先生は戸田先生に「私のこの構想した創価教育理論をもとにした学校をつくりたい。それも大学から小学校までつくりたいんだ。もし僕の時にダメだったら戸田くん、君の代でお願いしたいんだ」という話をされているんですね。ですから戸田先生の場合は、その昭和14年に牧口先生から聞いて10年間、ほぼ10年間ですね、昭和25年ですから、その間も戦時中の逮捕があって、独房での生活があって、戦争が終って出獄されて、その後の話ですので、その間ずっと戸田先生はそのことについて思索をされていたんだろうと推測できます。途中で色々な先生方が学校のことも話されたようですね。お聞きしましたら、亡くなれましたが、柏原ヤス先生。参議院議員を長い間勤められていて、最後は、創価女子短期大学の顧問として、本当に女子教育に生涯をかけた先生ですが、この先生が一回戸田先生にですね、「創価学会として学校をつくる、そういうおつもりはないんですか？」とお聞きになった事があったそうです。そうしたら、戸田先生が烈火のごとく怒って、「そんなことは考えなくていい」と言われた。ところが昭和43年になって、池田先生がこうやって学校をつくられた時に、初めて「あっ、戸田先生はあの時にそういうことを考えていらっしゃって、それをきちんと池田先生に伝えていたんだなって初めてわかった。その構想の深さを自分として初めて知りました」というようなお話をされていました。その意味では学校を創立すると簡単に言いますが、実はなかなか大変です。その学校をつくるということに対して変わらぬ執念を持っていた。これこそが牧口先生、戸田先生、池田先生のつながりであろうというふうに思います。

その戸田先生が学校の創立を見ずに、昭和33年に亡くなれました。したがって池田先生はその後、ずっとそのことを考えられて、昭和39年の6月30日ですが「第7回創価学会学生部総会」で、この創価大学の設置を発表されました。それに基づきまして、昭和40年11月8日に、「創価大学設立審議会」が発足を致します。ここで、正式に大学の設立を目指した様々な準備が進んでいきます。この準備というのはやはり大変でして、まず学校を建てる土地が必要である。建物が必要である。教員が必要である。職員が必要である。そういうようなものが揃ってくると、今度は図書館の本を揃えなければいけない。様々なことがありまして、それを一つ一つ丹念に追いか

ていこう、きちっと整えていこうということで、11月26日に「第1回創価大学設立審議会」が開会されました。この第1回設立審議会の席上で、重要な発表がありました。それは大学に先駆けて、創価高等学校の建設をする、つまり大学の前に高校をつくるんだ、ということが発表になったんですね。これには多分、色々な理由があると思います。大学と高校では、ご存じのように規模がまず違います。これは東京の創価学園を御覧になって、創価大学を御覧になっていただければ、キャンパスの規模自体が全く違う、ということがわかると思います。建物の大きさとか何か一切合切考えますと、色々な意味で、高校からつくり始めるというのが、当時の順当な一つの選択肢だったのではないかと。その翌年の4月に、創価高校の建設委員会が発足致します。これは、建物をつくるという意味で、学校の中身の問題というよりもまず、学校の、ハードとソフトに分けますとハードの方ですね。校舎がなかったらそれは学校になりませんので、どこに校舎を建てるのか、どこに土地を用意するのか、そういうことを踏まえて、昭和41年にこの発表がなされました。

そこで、昭和35年の4月5日です。創立者ご夫妻が小平市鷹の台の、現在、創価高校が建っている用地の視察をされているんですね。35年の4月5日ということは、会長就任が5月3日ですから、会長就任のほぼ1月前に創立者は、その高校の建設用地を、学校の、どういう形になるかは全くわからないと言ったらすごく失礼ですけど、どういう形にせよ、何らかの教育機関ということを考えつつ視察をされているということなんですね。これはやはり僕たちは、重く受け止めるべきだと思っています。要は、もう会長就任以前から、学校の創立というのを考えていたということは、先ほども示しましたように、昭和25年11月16日の段階で戸田先生が池田先生に「大学をつくらうな」とおっしゃったことが、いかに深く創立者池田先生の生命の中に刻まれていたか、そのたぶん一つの証だと思うんですね。会長の立場になったからやろうとか、そういうことじゃないんだっていうことなんですね。ここに素晴らしい一つの戸田先生、池田先生の師弟の関係が見てとれるんですよ。ここは、非常に重要な事実だと思っています。

昭和41年8月2日、「創価高校完成予想図」が『聖教新聞』に発表されました。これによると校舎は「鉄筋3階建て2棟」となっています。学園に行かれた方はおわかりだと思いますが、現在の学園の校舎は4階建なんですね。ところが、この一番初めの発表では鉄筋3階建てとなっています。「体育館、プールなど完備」という見出しで、一面を飾っております。当時の状況を聞きますと、これは大きな、夢が広がる一つの構想で、皆これを見て血が騒いだそうです。僕の母親もですね、実はこれを見て、自分の息子を創価学園に絶対入れようと決意したらしいんですね。その母親の決意が、私を今ここに立たせてるわけですけど、本当に母親の決意というものは、すさまじいんですね。時間を乗り越えますね。だからよく言うんですけどね、男性の仕事の期間はわずか50年だと。ところが女性の仕事というのは、50年から100年先、150年先までずっと永久に残ると言われますが、その如実な例かなとも思います。

昭和41年8月2日に、この創価高校の完成予想図が発表された。ところが創立者は、実際に、創価高校の用地を選ぶ時に様々なことを考えられていて、条件を4つ決められていたようなんですね。その4つの条件というのは次の通りです。

- 「一、武蔵野の大地にある。
- 一、富士が見える。
- 一、近くに清らかな水の流れがある。
- 一、都心から車で、1時間程の距離である」

このことは『新・人間革命』の第12巻に書かれています（307頁）。この4つを学園をつくる時の条件にされたということなんですね。さらに、なぜこの4つを条件にしたのかが明確にわかる記述があります。それは、

「山は王者、川は純粋な精神です。そして、武蔵野の平野は諸君の限りない希望であり、緑は潤いのある人生を表しています」

と、入学式当日に生徒たちに語られているシーンなんです（『新・人間革命』第12巻、334頁）。つまり教育環境によって、生徒たちを一つの方向に導こうとしたわけですね。そのための条件として、まず学校の立地条件が大事である。その立地条件から創立者は、小平市の鷹の台を見て回った。いくつかご覧になったと思いますけど、この鷹の台が良かった。それは、さきほどちょっとお話ししましたが、富士山も見える、そして脇に玉川上水が流れています。これは非常にきれいなもので、上水ですからね。もともとこれは江戸時代に、庄右衛門と清右衛門という兄弟が多摩川から水をひいて、江戸の町へ水を供給するために、大変な工事を行ない完成したものです。上水ですから、人の口に入る水です。当然ながら、流れは清らかでなければならない。その意味からすると、この条件が全部そろっています。そして、富士山を見て、自らその山の王者の風格を学び、川を見て純粋な精神を学び、そして、平野を見る。その平野には、物理的には雑木林以外に何にもありませんでした。開学の頃は、本当に何もなかった。栗林があるくらいです。もう何もなかったんですね。ちょっと話が飛んでしまいましたが、学園に入って色々な授業があったんですが、図工の授業がありましてね。図工で初めてやった授業が今でも忘れられないんですが、何をやったかと言うと鳥の巣箱を作ったんです、僕たち中学生は。鳥の巣箱を作ってどうしたのか。学園のキャンパスの中の、色々な所にかけたんです。そういう授業でしたね。その意味では、ここに書いてあるように、まさにこのキャンパスの自然環境を使って授業をやると言う典型的な授業だと思います。「平野に希望を見出し」、「緑は潤いある人生を表す」というところまで、お考えになっていたわけですね。こうした点がその後、どういうふうな影響を持ってくるのか自分でも計り知れないわけですが、そのような授業がまさに行われた。したがってそういう意味では、この条件がいろいろな形で整っているんだと思います。

実は、創価大学もこの条件にかなり合っているんですね。武蔵野の大地があって、富士が見えます。本部棟からきれいに見えますよね。近くに清らかな水の流れがあって、この北側に谷地川という川が流れているんですけどね。その川もありますし。都心から車で1時間程の距離である。これは、結果論的に構想通りになりまして、40分で新宿から来られるようになりました。これも条件がいいんですね。色々な意味で、こうした条件に合ったんだと思います。また、この話

は創価大学開学についての時にさせていただきます。いずれにしても、どこに学校を作るのか、という地理的な条件を真っ先に考えた。ここが一つのポイントになろうかと思います。環境は人間をつくる、これは確かに言えている。そういう意味では素晴らしいことですね。

今回ずっと研究をしていて、実はですね、ある一つの発見をしました。それは創立者がこだわっていたことです。こだわったこと、何を一番気にしていたか。つまり、創価高校、創価大学をつくる時に、それをどういうタイミングで、どういうふうにしようか、ということを先生はやはり考えられていたようで、当たり前ですけどね。その今更のことを発見して、自分で喜んでいただけですけども、どういうことか。まず、何回も出てきます。昭和25年の11月16日に戸田先生との対話がありました。これはもう、ここからしか始まりません。池田先生が学校をつくるということの始まりはここです。もっと長い目で見れば、さっき話しました昭和14年の牧口先生のところですけど、ここですね。昭和25年11月16日に戸田先生との対話の中で、その学校の創立を池田先生は聞かれた。その時にどうしたのかということ、こういうことですね。

「この時、伸一は、弟子として、何があろうが、必ず自分の手で創価教育の学校を建設しようと、固く、固く、心に誓ったのである」（『新・人間革命』第12巻、306頁）。

つまり、自分がどういう立場に立とうと、どういう状態であろうとも学校は自分の手でつくるんだ。こういう並々ならぬ決意があるわけです。ですから、この段階で、非常に深い深い思いが一つあった。昭和35年の4月5日、これも先ほど示しました。会長就任前、1か月前に池田先生は、今の鷹の台の学校用地を視察に行きました。その時の話です。

「当時、彼は、会長就任への要請を固辞し続けてきたが、首脳幹部から懇請され、就任を承諾せざるを得ない状況がつけられつつあった。伸一は、せめて戸田の7回忌までは猶予が欲しかったが、弟子として、学会を率いて立つ決意は固まっていた」（同上書、308頁）。

「伸一は、せめて戸田の7回忌までは猶予が欲しかった」と、こう書かれているんです。前に何度も読んでいるんですよ。何回も読んでいるんですけど気付かなかったんです。あっ、なるほど、先生はこだわっておられたんだ。それは師匠の戸田先生の7回忌なんだ。7回忌を済ませば一つは区切りがつくという、そのいわゆる仏法者としてのですね、宗教者としての何かの思いがあつての昭和39年6月30日ですね。これは何かというと、先生が創価大学の設立の構想を発表された時なんです。これも『新・人間革命』の中でこう書かれている（同上書、310頁）。

「伸一が、創価大学の設立構想を正式に発表したのは、戸田の7回忌をすませた、1964年（昭和39年）6月30日の、第7回学生部総会の席上であった」。

やはりここでも「7回忌」という言葉が出てきますね。ということは、戸田先生が亡くなって7回忌を済ませたいという事に、先生の何かがあったと。一つの区切りをつける、そしてもう一

歩先に進むのだという、そこに何か師匠に対する思いというのがずっと残っている。僕は何度か通読したのですが、今回こうやって皆さんの前で話をするために、もう1回と思って精読したら、この「7回忌」に引っかかったんです。戸田先生の7回忌は昭和39年4月2日なわけなんですね。これが池田先生の戸田先生が亡くなってからの目指すべき、一つのいわゆる目標と言いますか、区切り目だったんですね。これを知った時に胸が熱くなりました。そこで、この「7回忌」が過ぎてから、満を持して創価大学を建てようと、こうなったわけですね。ですからその思いの強さというのは、言うまでもありませんが、私たちが思っている以上に強かったということ、僕自身、本当に僕が今まで考えていたよりも、もっともっと深く強いものだということを、これを読んで思い、感じた次第です。これが今回一つの、僕にとって大きな発見でした。戸田先生の「7回忌」の後に「13回忌」が来るんですよ。この時もまたすごくいろんな思いがあって、「13回忌」に対して先生が色々なことを書かれているんですが、その分析はまた後々していきたいと思っています。

大学と学園ですが、「第1回創価大学設立審議会」での決定事項というものがあります。それはどういうものか。これは1966年ですね。昭和41年11月26日です。ここで何を決めたのかというと、1つは、大学より先に1968年頃に高校を開校し、大学の開学は70年以降にする。つまり高校を先に開学して、その後に大学。そして大学の開学というのは70年以降。70年代に入ってから、ということ、ここで正式に設立審議会で検討しています。次に、大学建設用地としては八王子市。小平市に購入してある土地には、高校を建設する。いわゆる建設の用地が、ここで最終的に決定致しました。1966年の段階でこれが発表されました。ところが、ここでもう一つの画期が参ります。それは何かというと、昭和41年の10月なんですね。創価学園の起工式が昭和41年11月18日ですから、その1か月前。起工式を1か月後に控えた10月に高校専門委員会の委員から一つの提案がなされます。それは一体何か。創価高校にも中学校を併設したい。中学校の併設を提案するんですね。

「山本伸一は、中学校を併設したいという意見を支持した」（同上書、315頁）。

なぜかという、

「中学生には、高校受験という問題が重くのしかかり、それが伸び伸びと学業やスポーツに打ち込む障害となっていることを、彼も憂慮していたからである」（同上書、315頁）。

こういうような話なんですね。それでは、この高校専門委員の方はなぜこの中高一貫教育をここで提案したのかというと、この高校をつくるためにですね、おそらく創価学会の中に教育者がたくさんいたわけですが、実際に学校をつくるとなると、全く違ったことを新しく始めなくてはなりません。そのために、その高校の専門委員の方々、先生方が何をしたのかというと、日本全国ですね、私立学校を全部隈なく見て歩いたそうです。隈なく見て歩いた中で、その当時、名

門と言われる高校は、必ず中高一貫教育だということに気付いたんですね。中学と高校を一貫して教育することが、大事なんだ。そのことをすごく痛切に感じたようです。これは早稲田も慶應もそうですね。学習院もそうです。そういうようなことをずっと考えて、それで思いもたつてもいられず、起工式が迫ったわずか1か月前なんですけど、それを池田先生に提案されたと言うんですね。それに対して先生は、そうしようと決断をされた。これで初めて中学校の併設ということが発表されました。

昭和41年11月13日付『聖教新聞』紙上に「創価高等学校に中学併設を計画」という見出しが躍っています。それで「開校は昭和43年春」「高校の創立と同時に」となりました。そうすると、43年の春に、中学1年生になる子どもを持ったお父さん、お母さんの夢が広がるわけですよ。もちろん中学校は義務教育ですから、これは、自分の地元の公立に入れてもいいわけですが、通えるんだったら通わせてあげたい。あるいは、地方のお母さん方は、何としても子どもを東京に送り出したい、というふうに思ったそうです。当然これは、この昭和43年の春に高校1年生になる、そういうお子さんを持ったお父さん、お母さんもその時にこの夢を広げたようですね。これは非常に大きな一つの画期です。そして11月18日に創価高校の起工式が挙行されました。したがって創価高校、創価学園の創立記念日はこの11月18日になっています。もしも、この時に中学校の併設がなされていなかったら、私はどうなっていたでしょう、という話なんですね。僕は、中学1期ですから、この時によくぞ中学校をつくって頂いたということで、感謝の念でいっぱいですね。もう自分で歴史を調べていながら、思わず頭がグッと下がりましたですね、これ言って下さった方はどのようなお方だったんだろう、なんて詮索したりなんかして、本当にそう思いました。中学校の併設がなかったらですね、全然違った自分の人生になっていたんだろうな、というふうに思います。

今度は、学校を具体的に設置をするために、昭和42年の4月、創価中学、創価高校の設置を東京都に申請しなければなりません。私立学校の管轄は、東京都の教育庁ですので、この東京都に申請を致しました。そこで創価学園の教育方針というのが、きちんと定められます。その一つ、「健康な英才主義」。これを謳います。これは、僕たちが学園に入ってすぐ「生徒手帳」をもらうんですね。自分の「身分証明書」と「生徒手帳」をもらいますが、「生徒手帳」の表紙をめくると、そこに創価高校の校旗と、教育方針が明記されています。これはおそらく、一生忘れないと思います。この「健康な英才主義」というのが今でも耳にこびりついています。ただその「健康な英才主義」というのは中身は何か。中身はどういうことかと言うと、これは先生がこういうふうに言われています。

「体も、心も、ともに磨き、鍛えながら、一人ひとりに内在している優れた能力を引き出し、育て上げて、それぞれの生徒が自信をもって、社会の指導者に成長していけるようにする教育である」（同上書、322頁）

と。これが一つ。二つ目の教育方針は「人間性豊かな実力主義」。こういうことが謳われます。こ

れはどういうことなのかと言いますと、

「生命尊重の理念に立脚し、限りなく豊かな人間性の開発を行いつつ、社会の指導者にふさわしい実力を身につけていくことを意味している」（同上書、322頁）。

ということなんですね。この二つが創価学園の教育方針として謳われています。英才つまり英知。それから人間性というのが実力、そして健康である、ということなんですね。健康については、よく言われました、池田先生は。これは、学園生へのご指導では必ず健康にふれられました。健康の中でもですね、今でも覚えているのは「近眼になるな。猫背になるな。虫歯をつくるな」ということでした。これはシンプルですけども、「近眼と猫背と虫歯、これは絶対に避けなくてはいけない。この三つがなければ必ず健康になれます」というお話しを、ずいぶん先生はされていました。大人になってから、様々な支障が出ないための基礎的な注意点ではないか、と思います。でも残念ながら私、虫歯で近眼になってしまいました。唯一、猫背だけは、ずっと注意していました、いつも胸を張って歩くようにしていました。今も学生から、「神立先生は、姿勢だけはいいいですね」と褒められています。猫背だけは、なんとか避けようと思ってやってきましたけど、これも池田先生の健康のご指導のおかげだと思います。この点は、牧口先生もおっしゃっているんですね。牧口先生も、「要は、子どもたちを育てるのに、なにが必要か。これは知力と体力で良いんだ」と。今、巷で道徳とかですね、倫理とかよく言われていますよね。愛国者を育てようとか、道徳が大事とか。道徳の教育はいらないと牧口先生は言うんですよ。牧口先生はね、健康な体力、つまり健康な身体と、それから優れた知力、一般的な知力と言ってもいいでしょう、普通の知力。知力と体力があれば、必然的に道徳というものが出てくるんだと。まともに考えて、普通の健康な身体であれば、道徳は必然的に身につく。それを押し付けるな、というように牧口先生はおっしゃっているんですね。これは、やはり創価教育の一つの根底に流れているものではないか。健康で、そして実力を持った人。このことが如実に、この二つの教育方針に表れてくるわけなんです。

さて、入学試験です。昭和43年2月1日に、中学校の入学試験が行われました。国語、算数、理科、社会の4教科です。募集人員が200名に対して、受験者数が約800名。入学生は、217名でした。高校の入学試験は、その後、2月15日に英語、国語、数学で実施されました。募集人員が300名に対して約1500名が受験。入学生が321名だったんです。ここから個人的な思い出話になるんですが、僕も2月1日に入学試験を受けに学園に行きました。でも、何にもなかったです。まだ校舎も出来たてで、コンクリートの匂いがプンプンする。もう本当にそういうような、真新しいものばかりでした。驚いたのは、玉川上水側に廊下があるんですが、その廊下のところの窓がですね、とても大きかったです。子供ながらに覚えてるんです。そこからものすごく光が入ってますね、なんて明るい学校だろうと。自分が生活していた小学校に比べて、この明るさは一体何かと思いましたね。そこで試験が行われました。1時間目は国語なんです。ところがですね、その国語の入試問題が配られると、教室の中で一斉にざわめきが起きたんです。「えーっ」みたいな、

いうに言われぬ声が上がった。それはどうしてかと言うと、その国語の問題がですね、ものすごく長かったんです。問題用紙の長さが1メートルくらいあるんですよ。それで裏表の両面に問題がある。そんな問題用紙、小学校で見たことはありませんからね、もうどうなっているんだろう、この問題。一体何考えているんだ、この学校の先生は、というように思いました。本当に長かったです。それで、チャイムになったら早速始めなくては行けませんからね。もう必死でしたね。制限時間内に終わるかどうか、と思って必死にやりました。

その次、算数だったんです。算数で出た問題、これもいまだに覚えてますよ。これは、2進数の問題で、今のコンピューターに使うもので、「0」と「1」の二つの数字だけで、すべての数字をあらわす方法です。これも、ものすごくショックだったんですよ、僕。この2進数というのは、小学校の算数の授業なんかではね、絶対に出てこない課題なんです。それを問題文で説明して、こういうふうを考える、こういう考え方で解くとどう解けるのかという。つまり読んで理解をして、その算数の思考力を試すという試験だったんですね。もう全然できなかったです。僕、算数が終わったあと、便所で泣きました。もうこれはダメだと。これだけ親に応援してもらって来けれども、これは落ちたな、と本当に思いました。全然できなかったんですね、算数が。だから、いまだにその問題が忘れられないんです。嫌なもんですね、中学校の時のショックというのは、ずっと引きずって生きるんですね、人間。あと理科と社会は、僕自身としては普通にできました。社会科は、ものすごく面白かった。数日前に見た問題集の中に載ってた問題が、そのままの形で1題出されていて、それ見てね、パッと書けた運の良さ。算数で泣いて、社会で笑ったという感じですけど、そういうようなことを皆んなそれぞれ持っていました。

たとえば、僕の友達で寺西さんという方がいまして。中学1期の卒業で現在、創価大学の副学長補です。色々なところで活躍して、前国際部長としてずっと大学に貢献されてきた方なんです。この寺西さんと時々会って、この入学試験の話をするんです。寺西さん北海道出身なんですよ。僕は東京出身。ところが関西から来てる人達が結構いてですね、この関西の人たちの言うてる言葉がわからんのですよ、何を言ってるのか。それでですね、試験の休み時間にね、ある関西の人が「自分どこから来たん？」と言うんですよ。自分って自分のこと？自分というのは、どういうことなんだろう。この人たち、何を言ってるんだろうかって。「自分」というのは「君」という意味なんですね、関西弁で言うと。もう全然わからなくてですね。そういう、その初めて出会った不思議な日本人に、周りを囲まれて入学試験を受けていたんだね、と寺西さんは、しみじみ述懐されておりました。それから高校の入学試験の発表の日は、すごく雪が降って、ものすごく大変だったみたいですね。大雪の中でその合格発表があって、この高校1期の先輩たちはだいぶ苦勞をされて、その合格発表を見に行ったということを話し合っていました。結局、この入学生217名と321名が中学の1期、高校の1期ということで、学園の初めての生徒として、創価教育の場に来る。生徒として来る、ということになったわけです。

ところで、この学園の入学前には宿題がありました。僕自身が知ってるのは中学校の場合だけですが、高校もたぶん入学までの宿題があったと思いますね。そちらの方は、僕はあまりよくわかりません。科目としてはまず算数ですね。もうドカーッと言う感じできました、問題集が。小

学校の学校の勉強をやるより大変でした、この宿題をやるのが。2月ですからね。2月の中旬から3月にかけて、やらなくてはいけないことになります。それを持って来いと言うんですよ、入学式の時に。もう悲惨な学校ですよ。どうなっちゃうんだろうと思いました。それからですね、もう一つは、国語です。読書感想文を書けというものでした。その課題図書が、山本有三の『路傍の石』、下村湖人の『次郎物語』。今大学生でも読んでいないです、こうした本は。難しかったですね。本当に難しかったです。それもすぐ買いに行き行って開いて見たんですけど、もうわからないんですよ、古い文体で。それでも読んで感想文書いて来いって言うんで、必死になって書いて持っていった記憶が、ふつふつと湧きあがって来ました。今思えば、「あー、大変だったな、自分なりによく頑張ったな」という感じですね。そういうような印象です。

こうした中でまた、創価学園の5つの指針というのが発表になります。これは先ほどふれました、創立者の「創価学園の入学式を祝う」という文章の中で示して下さいたものです。それは何か。これは、中学1年の時に毎朝復唱しましたので、今でも言えると思います。

「一、真理を求め、価値を創造する、英知と情熱の人たれ」。

先程申しました、教育理念ともいえるべき学校が目指す教育の方向性。この5つの指針というのは、生徒が目指すべき、そこに参加をした生徒が目指すべき理想像、目指すべき目的なんですね。だから、明確に示されています。

「一、決して人に迷惑をかけず、自分の行動は、自分で責任を取る。

一、人には親切に、礼儀正しく、暴力を否定し、信頼と協調を重んずる。

一、自分の信条を堂々と述べ、正義のためには、勇気を持って実行する。

一、進取の気性に富み、栄光ある日本の指導者、世界平和の指導者に育て。」

この5つが発表になりました。それでこの5つを僕たちは、本当に毎日毎日、読みました。これが先生の目標であり、先生がここを目指していたから僕たちもここを目指すんだという、そういう思いで一生懸命読みました。読んで5つのことを実現していこうと。自分たちも必死になって努力した記憶があります。ただですね、これは今だから告白できるんですが、一番最後の所に、

「進取の気性に富み、栄光ある日本の指導者、世界平和の指導者に育て」というのはですね、自分としてはよくわからなかった。「指導者」と言っても、何が指導者なのか、どういうのが指導者なのかということは、全くわかりませんでした。子供ながらに、「自分たちのような、自分のような人間が指導者にはなれないだろう」と。だけれども、その前まで、例えば真理を求めて一生懸命勉強をする、そういう英知と情熱の人間にはなれるだろう。迷惑をかけないで、自分の行動に自分で責任を取る、これは、当たり前だ。人には、親切に礼儀正しく、暴力は絶対にしない。信頼と協調。お互いに協調しあうこと。自分の信条を堂々と述べる。これは、もう中学生の頃から自分はおしゃべりでしたからこれは大丈夫だ、ずっとこう思っていたんですね。ところが、この指導者になるということが、どうもよくわからなかったんです。今になって振り返ってみますと、先ほどの一番初めの時にお話し致しました、この教育の現状を憂う時に何が最も憂うべきかという、責任ある指導者がいないじゃないか。未来に対する夢を描ける指導者がいないじゃないか、という池田先生の思いがあって、その思いが生徒たちに日本の指導者、世界平和の指導者に

育ってもらいたい、という願いになっていったのではないか。やっとこの年齢になってわかって参りました。要は、将来に対して、未来に対して、どうやって責任を取るのか。それこそが指導者なんだ、ということがだんだんとわかってきました。立場や地位や名誉ではないんだ。大切なのは、未来に対して責任を取ること。それこそが指導者の役割なんだ、ということを考えていきますと、全ての人が指導者たるべきだし、なれるわけです。ならなければいけない、ということがだんだんとわかってきたんですね。5つの指針というのは、その意味では、非常に僕たちにとっては、大きな、刺激的なものでございました。学園の先生方も当時、若い先生たちばかりでした。ですから、この5つの指針を目指して、教師と生徒が本当に一丸となって進んでいく、というような状況になったわけです。

昭和43年4月8日の中学1期生の入学式の記念写真があります。ここに写っている友人たちの名前を言えといわれたら、ほとんど全員の名前が言えます。覚えています。この中にですね、いろんな人がいます。例えば、新堀君。この人は今、弁護士です。佐藤福男君もいます。今はこんなに髪の毛はありません。この間も一緒に飲んだんですが、もうほとんど髪の毛がない状態で、大丈夫かと心配しています。この人は東京都の職員です、公務員です。非常にいい仕事をしています。それから、田口君。この人は公認会計士。あとはですね、札幌市役所勤務の田川君。斎藤静男君は練馬区議会議員。それから、瀬戸君というのは、城南信用金庫の支店長。木原君。NHKに勤務。堀木君。この人は両国橋のふもとで「桔梗屋」という、どじょう屋をやっている、3代目なんですよ。今年の1月7日に『聖教新聞』に取り上げてもらいましたが、元気いっぱい毎日のように泥鰌と鰻をさばいて頑張っています。私も年に1回、必ず彼の所へ行って1杯やるというね。一人ひとり全員とあげだすと、きりがありませんけれども。僕も写ってますよ、後ろの方で。この写真は背の高さの順番に並んで、写したんですね。僕、中学校の時、背が高かったんですね。150センチ以上だったんで、ずっと後ろの方にいました。

池田先生は入学式が終わってから、学園に着かれたんですね。それで「英知、栄光、情熱」の碑の除幕式とか、「青年と鷺の像」の除幕式をやって頂いて、その後に栄光橋で渡り初めを行い、それから記念撮影になりました。僕たちからすると、その時の創立者というのは、写真でしか見たことのない人。よく母親に会合に連れて行かれて、遠くの方でしゃべっていたから、全然顔もよくわからない人でした。それでもよく地元で、当時、8ミリでニュースをやったんですね。ニュースになると先生がバースと出ますのでね、あっニュースで見た人が歩いてると思いました、僕は。その程度でしたから、全然先生のことがわかっていませんでした。だから、ものすごく馴れ馴れしいです。僕だけではなく皆んな。だから、「なんだか皆んな背が大きいね」と先生がおっしゃったら、誰かが「それは先生が小さいからですよ」と言ったっていうんです。よくぞ、そんなこと言えたなって今になって思うんですけども、当時の中学生は、全然池田先生の偉大さとかすごさがわかりませんので、自分の友達と同じような感覚ですよ。この時、先生、昭和43年ですから40歳です。今の僕よりもずっと若いんですよ。40ですからね、40にして学校をつくって、こういう形で学園を始めたわけですから、それを考えますとね、想像を絶する存在であったと思います。

さて学園生活ですが、まず4月8日の入学式の翌日9日。「実力試験」がありました。学校に通い始めたすぐ次の日ですよ。昨日まであれだけ騒いでね、おめでとう、おめでとうと、学園の先生方も激励して下さってね。「皆頑張るなさい」と言われて、その舌の根も乾かないうちに試験です。実力試験は、悲惨でした。成績の一番から最下位まで、全員発表されたんですよ。今では考えられないでしょ。この非人間的な、もう個人情報もくそもあったもんじゃない。それが発表されてましてね。いやあー、ショックでした。高校はよくわからないので、中学校の話ばかりになってしまいますが、このときの仲間たちは、聞いてみたら、各地方、各地域で、その小学校のトップクラスなんですよ、成績が。僕の隣で受験してた多賀雄司君という人がいるんですが。今本部に勤めているんですけども、多賀君は、日本橋の兜町で生まれ育った人なんですね。この日本橋の小学校で、戦後始まって以来の天才だと言われた人なんです。こういう人がいたりですね、先程も話題にさせていただいた、富良野から来た寺西さんも、富良野の中ではもう飛びぬけてできるってことなんです。そういう人たちだったんです。それぞれ皆んな、各地域の学校でトップクラスなんですよ。僕もこう言うてはなんですが、恥ずかしいですけども、こうなったってことで。僕は、練馬区の北町小学校という小学校に通っていたんです。この北町小学校のその時の小学6年生の中では、トップ3には入っていました。開成中とか麻布中に行った連中もいましたが、そんなにでは悪くなかったですね。威張っていましたしね。だからもう自分は、どこに行っても大丈夫だと思っていたんですね。ところが、この実力試験で、ものの見事にそういう天狗の鼻を、バキーンと音がするほど折られたという感じですね。その時の成績はものすごく悪かったです。言いません、言えません。「何番だったのですか？」と今、質問があったのですが、言える順位じゃありません。ところがね、この時の他人のね、成績の順番を覚えてる人がいるんですよ。同窓会で集まるでしょ。「あの時、君は何番だった」って、そういうことを本当に記憶している人がいるんですよ。もう本当に質が悪いって言ったらなんですが、変った人がいましてね。未だに皆んなで集まっていると、この思い出話に、「あの子ひどかったな」、「君は何番で、君は何番で、君は何番だ」と、みんなに言うんです。僕、自分で覚えてなかったんですが、彼と会って思い出させられました。自分の順位を。ひどかったですね。すべてこういう感じでした。4月29日に遠足がありまして、河口湖に行きました。ところがですね、土砂降りです。土砂降りでは何か覚えてません。とにかく、バスに乗って行ったってだけです。もう何も覚えてません。ほとんど何も見ず、バスの中で騒いでいただけでした。

国語の授業がありまして、その時に読まれたのが、高山樗牛の『滝口入道』という本なんですよ。これ、一回皆さんご覧になって下さい。買えとは言いません。『滝口入道』という本をどこかで手に入れて、ちょっとバラバラと見て下さい。13歳の少年が読めるものかどうか。僕は50代になりましたけども、この本、読む気になりません。古文に古語で、ものすごく難しいんです。なんでこんなの読ませたんだろうと思います。ただ何か夢があったんでしょうね、国語の先生に。これを読みました。そうしたらこの中学校の国語の先生がですね、高校の1期生にですね、高校の先輩たちに「いいか、中学1年生が高山樗牛の『滝口入道』読んでるんだぞ。君たちはそれでいいのか」というようなことで、プレッシャーをかけたらしいんですよ。だから今、高校の

1期生と会うと必ずそれを言われます。『『滝口入道』読んでたんだらう、君たちは』と皮肉たっぷりに言われますね。そのくらい難しかったです、これ。結局読みきれてません。何を書いてあったか全く覚えてません。どういうものだったか、内容も覚えてません。ただ難しかったことは覚えています。それしか覚えていません。

数学です。数学はですね、中学1年生の間で、中学1年生と中学2年生の教科書、全部終わりました。ものすごいスピードで進みましたね。今になって振り返るとですね、まさに実験道具ですね。モルモットです、これ、明らかに。だけど夢に燃えてたんですね、先生方が。もう一つあります。英語で通常の教科書を全く用いませんでした。リスニングだけです。聞いていけば良いんです。それで教科書は『English 900』という英会話の教材でした。今でも持ってます、思い出に。全部会話です。会話のガイドだけで、文法とか何か一切ありません。ずっと聞かされて反復するんです。だからその時に覚えたセンテンスというのは、今でも覚えてます。その都度、覚えさせられた文章とかですね。ただ記憶しろ、覚えろ、こういう授業だったんです。高校から入ってきた高校の4期生がいるんですが、この高校の4期生の人たちに聞いたら、まさにこんな国語、数学、英語の授業、こんなこと他の公立の学校では一切やってません。特殊な授業だったんですね。5月21日に映写会がありました。これは「椿三十郎」でした。おもしろかったですね。まだ白黒映画でしたけれども。このような映写会は、よくやってくださいました。講堂でね。一生懸命に見た覚えがあります。6月30日が、創立者をお迎えして、体育館の後ろ側にあったプールの使い初め、「プール開き」というのをやりました。池田先生がスタートのピストルを撃って下さり、皆で競泳をやりました。7月14日が栄光祭。これは寮生のお祭りで、この当時はですね、第1回目ですから、寮の生徒たちが故郷に帰る前に何か楽しいことをしてあげた方が良いのではないかと、という池田先生のご提案で、寮生を中心にした一つのお祭りがありました。それがこの栄光祭ですね。

ところで、この1学期の間に中学校の代表メンバーにですね、高校の数学を自主学習させるプログラムが始まっていたんです。これは、中学1年生にですね、高校1年生の数学の参考書を与えるんですね。自分で勉強しろって。先生は何も教えてくれません。参考書を読んで、自分で勉強すれば良いんだよ。こういう投げやりな教育ですね。これをやっていました。とにかく教員の先生方が若いんですよ。大学を出てきたばかりの先生、もう20代のバリバリですね。体力もあれば、迫力もあれば、叱るときなんかだって、むちゃくちゃ叱りますからね。理路整然なんて、一つもありませんよ。今日お話がありました、山本学長もこの当時、理科の先生で、僕たち習いました。その中学校の時に習った、理科の先生が自分の職場の上司になるなんて、とても思えなくてですね。これにはすごい縁を感じますが、この学園はですね、もう一つ特色があって、いろいろな本を読ませました。とにかく徹底して本を読ませました。僕、中学1年生の時に読書ノートをつけなさいと言われて、読書ノートをつくりました。それを開いてみると、中学1年生の1年間に約200冊程度読んでます。これ読まれたんです、先生に。

もう一つ僕は、この時1学期の段階で、ある先生から特殊なプログラムを要求されて、それは一体なにかというと、『聖教新聞』に連載されている、池田先生の「人間革命」を必ず原稿用

紙に写して持って来なさい。全文まるまる写して、それで自分がここはすごいところだと思った箇所に線を引いて、持って来なさい、と言うんですね。それがどのような状況を僕にもたらしたかと言いますと、当時、先ほど言いましたように、僕は練馬から通っていました。通学時間が1時間半くらいかかるんです。ですから、朝5時半に起きなくてはいけないんです。朝5時半に起きて6時半に家を出ます。それで学校に着いて8時ですよ。授業が始まって、終わるのがだいたい3時から4時ですね。クラブ活動やります。終わると5時から5時半くらいになります。家に帰るともう7時過ぎです。ご飯を食べてお風呂に入って8時くらい。8時過ぎになると山のように出された宿題をやるわけです。それが終わるのが11時から11時半。そのあとから「人間革命」を写し出すわけです。普通に起きていれば、たぶん1時間もかからないんでしょうけれど、眠いんですね。もう眠いから、どこを写しているか、わからなくなるわけですよ。ガクッとなったりですね、自分で机の上に頭をぶつけて起きるといったことがあって。それで、それを写し終わると、だいたい12時半から1時です。そうすると、次の日また5時半に起きなければいけない。だから僕の中学校の生活というのは、1日4時間から4時間半の睡眠でした。よくもったなと思います。それで学校に行くとは、学校の授業の中で、やはり皆さんすごく、出来が良い子ばかりで、とにかくよく理解しているんですね。予習をきちっとやってくるんですよ。だからものすごく授業の進み方も早い。僕はもう理解が出来なくて、本当に悔しい思いをした。悔しいからどうしたかという、日曜日しか勉強する時間がとれないんですよ。だから日曜日も朝8時から起きて、夜の8時まで勉強するっていうね、そういう徹底した鍛え方をされたんですね。今考えてみますと、その時は本当にこの学園の教育を恨みました。なんでこんなことをさせられるんだろうって。なんでこんなことまでやらなきゃいけないのかと、ずっと思っていました。遊ぶ時間などは、全くなかったですから。とにかく必死になって1日を過ごす。この繰り返しでした。けれど、やはり50代になって振り返ってみると、その時に読んだ本だとか、その時に池田先生の「人間革命」を写すことによって学んだ先生の文体とかですね、これは残るんですね。僕は中学3年間ずっと『聖教新聞』に毎日掲載される「人間革命」を写し続けてですね、今でもその時写したものが残ってますが、その原稿用紙を積み上げていきますと、段ボール3箱から4箱くらいあるんです。3箱半ですかね。それが残ってます。それが自分の青春の一つの宝だと思ってるんですけど、そういうことをして下さったんですね、先生方が。本当にその意味では、むちゃくちゃでしたけれども、本当に今、振り返ってみると大変に有り難かったなと思います。

寮生に聞きますとね、寮でやはり寮担の先生、その時「寮担」と言いましてね、寮の担当の先生がいるんですよ。当時、地方から来た人を面倒みるために、寮に必ず先生がいるんですね。消灯時間があって、消灯しますよね。だけど宿題なんて終わるはずがないんですよ。そうすると皆、先生に隠れて電気つけて勉強してるわけですね。そうすると、それをまた怒るわけですよ、寮担は。「お前ら、何で守らないんだ」とか言ってですね、怒って呼び出して、正座。廊下に正座させて、徹底的に叱るわけですね。そうこうしてるうちに先生方も眠たいものだから、寝ちゃうわけですよ。生徒は、その正座のまま朝を迎えるわけですよ。こういうことが何回もあったんですよ。この間も同窓会に、関西学園長の塩田先生が参加してくださったんです。その塩田先生に恨

み辛みを皆んな、それぞれぶつけていましたけれどね。もう「悪かった、悪かった」と謝っておられましたけれど。みんなで大笑いをしました。そういうこともあった。寮担の先生方も、本当に寝の時間のないなか、一生懸命やって下さっていたんだということが、この歳になってみると、やっとなんてわかってくる、そういうことです。非常に大変でした。

また、詩や作文を書かせることが多々あったという点ですが、本当に作文とか詩をよく書かせられました。宿題に必ず出てくるんですね、詩を書けて。これはやはり国語の教育としては、いいかもしれません。僕、よくいろんなところでお話するんですけども、人間ってものを考える時にどうやって考えるか、という話です。人間がものを考える時に、何を使って考えるのかというと、日本語使って考えているわけですね、私たちは。頭の中で自分と会話するわけですね。日本語で考えるわけですから、日本語の力というのは、すごく大事になってきます。日本語の力というのは一体何かというと、語彙力なんですね。語彙力が豊富であればあるほど、考え方は広くなるし、深まります。だから、どれだけの言葉を知ってるのかによって、人間の考え方の広さと深さに差が出てくるんです。じゃあどうすれば語彙力がついてくるのかというと、読書です。間違いなく読書です。読書とそれからもう一つは、新しい言葉を知るのに最も適切な方法は、詩を読むことですね。詩というのは言葉をぐっと省略した、いわゆる言いたいことを、一つの言葉の中に凝縮するわけですから。例えば、中学校の時に覚えた「碧空」という言葉があるんですね。「碧空」というのは何か。これは「青い空」のことを言うわけですよ。青空とか青い空というのと、碧空というのは全然違うわけですけども、青く澄んだ、透通するような空を示します。語彙力があると色々な使い方ができますね。人の話を聞いても理解しやすいし、それから人に伝えることをも言い換えが可能ですから比較的うまくいくわけで、その意味でもやはり本を読んだり、詩を書いたり、詩を読むことは、すごく大事な作業だなと思います。今、おそらく中学校の教育で一番欠けているのは、こうした国語教育なのではないかと、個人的には思っています。本学の入学式、卒業式、特に入学式ですけども、創立者がお見えになって強調されることが3つあって、一つは、親孝行ですね。「親孝行なさい」と、よく言われています。もう一つは、語学ですね。「語学を学びなさい、今、語学ができない人間は全然ダメだ、使いものにならないよ」。3つ目は「本を読みなさい。本を読むことなんだ」。この3つを必ずおっしゃるんです。この数年間で、色々例は変わりますが、おっしゃっている本質は、両親を大切にすること、語学を勉強することと読書なんですね。ですから、創価大学でも今、読書をしようという運動を学生主体でやっていますけども、本を読むことってすごく大事だ。それが創価学園のこの1学期のところで本当に如実にでていたなと思います。それから2学期、3学期ですが、夏休みの宿題が出ましてね。中学1年生に対して出された宿題がですね、原稿用紙20枚以上の小説を書きなさい、というものでした。「小説って何」という感じですよ、中学1年生ですから。小説の「しょう」の字もわからない。それに対して「小説を書きなさい」という宿題だったんですね。これにもびっくりしました。どうしようかと思いました。僕自身は書くことがそんなに嫌いじゃなかったものですから、わりに前向きに取り組んだのですが、何を題材にしようとか、すごく考えました。その時に思い付いたのが、父親の半生を書いてみよう。父親を主人公に仕立て上げまして、父親のことを書

こうと思いついたのですね。なぜそういうことになったのかというと、「人間革命」を写していたからですね。「人間革命」は、池田先生がご自分のことを山本伸一として、戸田先生のことを書かれ、そういうある特定の人物、特定の流れのことを小説に仕立てて書かれていた。それは僕が1年生の時にずっと写してきたわけで、自分の父親のことであれば、もしかすると書けるかもしれないと思ったんです。父親が帰ってきますと、毎晩のように取材をしていたんです。よくわからないですから、戦争時代のことは。母親にも取材をして、取材をしたノートをずっと作ってですね、それで書いたんですね。この小説が、ちょっとした波乱を呼ぶんですね。これまた後で、お話します。

それから夏期行事で臨海学校、地理巡検、夏期の補講というものがありませんでした。夏期の補講は、たぶん高校生だけだと思います。補講というのは、通常と同じ授業をやるんですね。臨海学校もこの年初めて行われたのですが、当時、そういう施設が学園にございませんでした。そこで学会の施設をお借りして、臨海学校をやりました。臨海ですから海ですから、この時にお借りをしたのが三崎の研修道場です。神奈川県。三崎の研修道場に皆で一緒に行って、それで臨海学校を楽しみました。創立者が臨海学校の時にお見えになって、そこに参加した生徒たちを激励されています。一緒に泳いだり、スイカ割りをしたという話が残っています。それから地理巡検というのはですね、学園の付近の小平市の色々な地理上の珍しい場所を、見て回るんですね。これは中学生対象でした。「まいまいず井戸」というのを今でも覚えています、武蔵野の台地は水がないんですね。水がないけれども水が必要だから、井戸を掘らないといけません。ところがその井戸というのは、すごく深く掘らないと水が出ない。深く掘った時に「まいまい」、いわゆる「かたつむり」ですね。かたつむりの貝と同じような道を、ぐるぐる回ってずっと下まで降りていく。そうした井戸を「まいまいず井戸」と言います。こういう井戸を見に行ったりしました。これが夏休みの行事でした。

9月2日始業式と同時に第2回実力試験。1学期には、当然2回試験があるんですね。中間試験と期末試験がありました。この時の実力試験もそうなんですが、全ての試験が第1回実力試験と同じように1番からビリまで、学校の中庭に全員の名前が張り出されます。もう本当に悲惨ですよ。それで2学期の始業式の時にですね、今でも覚えているんですけども、高校生が、校舎から見える中庭に立たされているんです。普通校舎という、通常の授業を行う僕らの教室があって、特別校舎という、生物学や、地理や歴史の社会科の特別教室などがあったり、実験を行える教室がある校舎と別れているんですが、その真ん中に中庭がありました。業間体操という2時間目と3時間目の間の休み時間に、体操をするんですね。目を覚ますために。その体操もこの中庭でやりました。さて、2学期の始業式の時ですけど、中庭の朝礼台の上に、高校生が立たされてるわけですが、それも全員丸坊主で。どうしたのかなと思ったらですね、宿題を忘れた高校生は、全員丸坊主に刈りあげて立たされてるんですね。もうなんだか軍隊と同じですよ。本当にすさまじいことをやっていましたね。この2学期の始業式に、第2回目の実力試験がありました。

それから「グランド開き」というのをやりました。9月6日です。「グランド開き」はあとで詳しく話をします。10月10日マラソン大会があり、10月24日映写会がありました。その時の映画は

「禁じられた遊び」です。暗い映画でした。暗い映画だなんて思っただけで帰ってきたのを覚えてます。11月18日が創立記念日で、講演と弁論大会がありました。この弁論大会で優勝したのが、高校では羽吹さんです。現在のアメリカ創価大学の羽吹学長ですね。すごくおもしろい弁論でした。その当時の公立高校の教育を、徹底的に批判されていましたね。今でも覚えてます。高校の先生たちが成績を決める時に、答案用紙を上から落として一番遠くに飛んだやつが成績が良いんだ、というような決め方をしている教師がいるんだ、といったすごく熱い弁論でですね、中学生としてはボカーンと聞いてましたね。なんてことを言う人なんだろうって思っただけで、見ていましたけれども。それから12月21日に創立者を囲む寮生の会食会があり、1月8日、3学期の始業式、第3回実力試験。もう試験ばかりです。2月に入学試験。これが2期生の入学試験になっています。3月25日が終業式。これで開学1年目が終わるんですが、この中で後々重要だと思われるのが、「グラウンド開き」です。なぜ「グラウンド開き」と言ったのかということを含めて、午後にお話をさせて頂きたいなと思います。

それでは、午後の講義を始めさせて頂きます。創価学園の開学1年目、創価大学ではないところがまた大変で、まだまだ何年分も語らないといけないんですけど。さて、創価学園の話で、学園開学年の2学期から3学期のお話を先ほどさせて頂きました。学園が開学した時に、結局中学生が217名、それから高校生が321名入ってきたという話をさせて頂きました。校舎は4階建てに変わっております。新しい校舎、中学校を併設するというので、一番初めの計画では3階建てだったのですが、結局、最終的に6学年入るわけですから、6学年用ということで4階建てになったんですね。ところが6学年入るんですけど、1年目は2学年しかいませんから、もう本当に広々と使わせて頂きました。僕たち中学1年生の先輩というのが、高校1年生なんですよ。つまり、中学2年生と中学3年生がいらないんですよ。ですから、僕たちの直接的な先輩が高校1期生ということになります。さきほどちょっと話題で出しましたが、アメリカ創価大学の羽吹学長とか、本学の田代理事長、馬場副学長、短大の石井学長とかですね。この人たちが僕らの直接の先輩なんですよ。中学生はこういうものを読んでるんだぞと、先生方は高校生にプレッシャーを与えたんですけども、その反動もあってですかね、高校生が中学生に「君たち、これ読んでるか」と、こういう形でぐるぐるまわりで、僕らも先輩たちからいろいろなことを教えてもらいました。ですから高校1期のそういう先輩たちと会うとですね、未だに自分の兄貴みたいですね、羽吹先生も自分の兄貴みたいな感じで、何でも相談できる、非常に素晴らしい存在で、有難いなと思っています。

学園の開学1年目ですが、色々なものが揃っていないんですね。現在、東京の創価学園のグラウンドは、学園に行かれたことがある方はご存じだと思うんですが、栄光橋を渡りますとグラウンドになっています。グラウンドの奥が小学校になっているんですけど、僕らが入学した頃のこのグラウンドというのは、茶畑でした。学園が始まった4・5月は、実際まだお茶がなっとうで、茶摘みもしました。茶摘みをやって、それを給食のお茶にしていたんですね。そういうこともあって、グラウンドがないものですから、体育の授業にしても、何にしても大変なんですよ。そこで、

とにかく皆でこのお茶の木を抜こうということで、体育の時間を使ってグラウンド整備をずっとやっていたわけなんです。もちろん僕らだけの手でできるわけもなく、業者も入って、きちっとしたグラウンドに整備をしていただき、この2学期のちょうど夏休みが終わって学期明けの時に、「グラウンド開き」をやろうということになりました。それで創立者をお迎えして、きちんとした会合にしようではないかということで、いろいろ出し物の練習も致しました。この時はまだ、体育大会はありません。運動会というのがないんですね。その運動会の代わりということもあって、「グラウンド開き」を学園の先生方が企画をして下さったらしいんですね。僕らはそのようなことを全く知りませんで、必死になって、とにかくお茶の木を抜いて、グラウンドを整備して、それでこのグラウンド開きを迎えようと思って頑張ってやっていました。

短大の石井学長の話が出ましたんですが、この石井先生は新潟県出身なんですね。新潟県出身で、家庭も経済的に苦しい環境だった、とご自分でおっしゃっていましたが、何が楽しみで創価学園に來たかという、野球が好きだったんですね。野球のスパイクだけ新しく買ってもらって創価高校に來た。甲子園に行くことが夢だったんですね。しかしそのスパイクを履いて野球をやるグラウンドがないんですね。お茶葉がなっているグラウンドでスパイク履くもんだから、せっかく買ってもらったスパイクが、ただただ埃まみれになっているだけでね、本当に悲しい思いをしたんだと、この間お話されていました。そのような状態だったんです。その「グラウンド開き」を創立者をお迎えしてやりました。このグラウンド開きは9月6日ですが、創立者が一番最後に種々様々、中学生、高校生を対象にして「21世紀を開く中核たれ」というお話をされたんですね。そのお話というのは、

「将来、創価大学をはじめ、各種の学校をつくる予定ですが、やはりその出発点は、創価中学校、創価高校であることをいっておきたい。それが、あくまでも軸であり、根本です。その中でも昭和43年度に、今現実に集った諸君が根本です。『源遠ければ、流れ長し』という哲人の言葉がある通り、源は、一番大切なのです。その源こそ、今日集った五百人であり、皆さん方の存在を、創立者として、一生涯胸の中に忘れないでたたきこんでおきます」(『建設の1年』、18頁)。

こういうお話をして下さいました。そこに集った我々中学生や高校生はもうこのお話を聞いてですね、ものすごく感動致しました。そもそも若者というのは、自分の存在価値を本当に色々な人に認めてもらいたい、見ててもらいたい、そういう盛りの頃ですね。それを先生がですね、君たちが一番大事なんだ、と言って下さった。それについてはものすごく感激致しましたし、そうなんだ、と。僕たちがやらなくちゃいけないんだ、という使命感が出てきました。その意味では、ここでのお話というのは、僕たちにとっては非常に重要で、僕自身もこれが一つの原点になっていると言ってもいいと思います。その中でこういう話もして下さいましたね。

「仏法の偉大な定義の一つとして、五百弟子品という經典がありますが、きょう集ったこの五百人の生徒の数と一致しているのです」(同上書、19頁)。

こういうお話もして下さいました。だから中学1期、高校1期がとにかく団結をして、今後の創価教育、その創価教育の機関、そういうところまできちんと責任をとっていかなくてはならないんだという、そういう使命を先生が与えて下さったんだと思いました。

それからもう一つ、開学1年目で大きなポイントになってくるのが寮歌なんです。現在は校歌になっています。寮歌というのはそもそもどういう形で始まったのかというと、昭和40年代当時よく言われていたのは、その当時の日本を動かしていたのは、「一校」の寮歌と「三校」の寮歌を歌った人たちである。今後は、やはり学園でもそういう寮歌をつくって、その寮歌を歌った人たちが将来の日本を担っていくんだ、その意味で寮歌は大事だ、ということで、この寮歌をつくろうという気運が盛り上がったんですね。それで寮生を中心に皆、歌詞を書きました。先ほどちょっと紹介致しましたが、創価学園というのは詩をたくさん書かせたんだ、という話をさせて頂きましたが、この歌詞もそのうちの一つで、皆はとにかく色々な歌をつくりました。その中で寮歌というのが一番重要で、一番重いものだという自覚がありまして、ここで様々な人が寮歌の案を書いたんです。それで何回出しても、だめ、何回出してもダメ、という繰り返しの中で、ようやく決まってきた寮歌というのが、これは『新・人間革命』第12巻の中では人物名が変わっていますが、小倉裕児さんという高校1期生の方が作ったものでした。小倉さんは、非常に文才豊かな方です。その小倉裕児さんが、「草木は萌ゆる」の作詞を致しました。本当に自分の思いを綴った、というふうにおっしゃっています。当時、まだ小倉さんは信仰をしておりませんで、家族は信仰していたらしいんですが、創価学園に入って先生と出会うことによって、自分たちの使命というものを考え始めたということです。その書いた詞に、杉野先生という音楽の先生が曲をつけて下さったんですが、初めはとても明るい感じの歌だったらしいんです。ちょっと若者向けの歌謡曲といいますか流行歌といいますか、そういう音調を取り入れた明るい歌だったというんです。しかし、どうも寮生がですね、そうじゃないと。こんな軽い感じの曲じゃない。もっと「一校」の寮歌とか「三校」の寮歌のような、重い雰囲気のある歌がいいんだ、と当時の高校生は主張したそうなんです。それには、杉野先生も「ぎやふん」ときてですね、「そうか。じゃあ、君たちが描いているそのイメージの曲をつくろう」ということで、何回も何回も推敲する中で、今皆さんご存じの「草木は萌ゆる」という、この歌に落ち着いたということなんですね。この歌詞について、創立者は非常に喜ばれました。その喜ばれた中身というのが、これからご紹介することで、創立者がいつもおっしゃっていることなんですね。

「歌詞は4番からなり、『草木は萌ゆる 武蔵野の……』から始まって、武蔵野の春夏秋冬と、創価の学舎で青春を過ごす意味を、問いと答えによって詠いあげていた」（『新・人間革命』第12巻、352頁）。

この問いと答えというところに、創立者は非常に高い評価といいますか、非常に重要性を見つめられたようです。

「1番では、『英知をみがくは 何のため』と問い、『次代の世界を 担わんと』と答えが示されている。

2番には、『情熱燃やすは 何のため』『社会の繁栄 つくらんと』、3番には、『人を愛すは 何のため』『民に幸せおくらんと』、4番には『栄光めざすは 何のため』『世界に平和を 築かんと』とある。

それは、自身の生き方を問い、崇高な目的を確認し、勇んで進みゆかんとする、壮大な気概の歌であった」(同上書、352頁)

と、こういうふうに先生は、学園の寮歌を評価して下さったんですね。自らが自らに問いかけて、その答えを自らが見つけ出していく。これは、まさに牧口先生が示された価値創造の一つのあらわれなわけですね。自らが問う、問うべき問いを自らが生みだして、それに対しての答えを見つけていく。これは基本的な学問のあり方と同じです。それを高校生が歌詞として、詩として詠みあげたというところに、創立者は高い評価を与えて下さいました。そして、最終的に学園寮歌を聞きながら、

「彼らの一途な開道の心意気に、なんとしても応えたいと思った。そして、寮歌の5番の歌詞をつくって、贈ろうと考えた」(同上書、355頁)。

つまり創立者に、「5番の歌詞をつくらう」という気持ちを起こしていただくような歌だったんですね。この歌は僕たちにとっても、思い出深い、非常に重要な歌になりました。今でもやはり学園の卒業式とかにお招きを頂いて、学園に行って高校生とこの歌を歌うとですね、何か熱いものが込み上げてくる、こういう歌ですね。

この間も、安西先生という慶應義塾大学の元塾長が創価大学に来学されて、山本学長とお話をされたそうです。対談をされたそうなのですが、そのなかで、福沢諭吉と創立者池田先生の比較をされたそうです。比較して一つ似ているところがあった。それは何かというと、著作が非常に多いところだ。非常に物を書いている量が多いんですね、福沢諭吉も創立者も。ただ違うところが一つある。福沢の書物の中には「何のため」のような問いかけをする文章は一つもない。池田先生は「何のため」と、皆に問いかけられている。そして皆と共に、それを考えようとしている。そこが全く福沢と違うところだ、と言って感動して帰られた。そういう話を学長からお聞きしました。この「何のため」という問いかけが、創価教育の、何か中核であるものを示しているんだな、という感じがします。本学のA棟の前には、ブロンズ像が2つありますが、その中の1つが、創立者が箴言として書いてくださった、「英知を磨くは何のため 君よそれを忘るるな」です。これが、この寮歌から引き継がれてきている根本的な考え方の一つなのではないかな、と思っています。その意味で「草木は萌ゆる」は非常に重要な歌でした。

ちょっと先走ってしまいますが、この歌は実は今、学園の校歌になっているんですね。僕らが入学した時の校歌は全然違って、もう少し明るい歌だったんですよ。「あゝ遥かなり 野は明けて」という歌だったんです。すごく明るい歌で僕たちずっとそれを歌い続けていたんですが、ある時やはり「草木は萌ゆる」を校歌にしたほうがいいのではないかな、という話になりました。それは昭和54年にですね、学園が初めて甲子園に出場したんですね。元近鉄バッファローズの小野君がエースで出たんですよ。僕もちょうどその時大学院生で、北海道で「第2回世界平和文化祭」を

開催するということで、創立者のお手伝いをさせて頂きに、北海道に行っていました。ちょうどその試合があったのが、厚田墓苑に創立者がいらっしゃった時でした。SGIの祝賀祭をやるということで、厚田にいらっしゃったんです。試合は結局、京都の東山高校というところと戦って、わずかな差で負けたんです。初戦敗退だったんですね。それでもう皆んな、がつくりきましてね。元気という元気が、すべてもうなくなって、シュンとしていたんです。創立者は、祝賀祭に行かれました。帰って来られた時です。我々が作業をしている場所に来られてですね、真っ先に大きな声で怒鳴られました。なんて言われたかという「学園出身者出て来なさい」。こういうふうに言われたんですね。その時に、そこにいた学園出身者というのが、田代さん。田代理事長と石井短大学長と、僕もいたんで、3人で慌てて先生の所に走っていったんです。先生は強い語調で「今日学園が野球で負けたのは、君たちの責任だ」。そして、「今日の夕ご飯はなしだ」と言われたんですね。池田先生は、さぞかし悔しかったのだろうなと思いました。そう言われて、お部屋に行かれました。その次の日、ちょうど北海道でのご指導の間で、先生が随分お考えになったようで、甲子園で勝った時に歌う歌は校歌だから「あゝ遙かなり」じゃないか。この歌を歌っても皆知らないぞ。皆知っている歌は何か。それは「草木は萌ゆる」だ。「草木は萌ゆる」は皆知っている。だったらこれを校歌にした方がいいのではないか、というご提案があって、それで学園の先生方がお集まりになり、色々と議論を重ね「草木は萌ゆる」が校歌になっていった、という背景があるんですね。ですからこの「草木は萌ゆる」という歌に対しての創立者の思いというのは、非常に強いんですね。我々もこれを歌うと、いつも熱いものが込み上げてくるというのはそういうところがあって、この寮歌というのは、学園開学1年目の一つの大きな出来事だった、ということが言えるのではないのでしょうか。

それからですね、これが午後の中心的な話になってくるかと思うんですが、開学2年目に入ります。昭和44年4月8日に第2回の入学式がございました。中学の2期生と高校2期生が入学をして参りました。中学生が204名、高校生が311名。われわれも初めて後輩ができて、非常に浮かれた気分になってですね、やっと少しものを言える人ができたぞ、という感じでした。創立者は4月8日の入学式には、やはり出席をされませんでした。しかし式自体が終わった後に、お見えになりました。お見えになって中学2期生、高校2期生を激励して記念撮影をされたんですが、さらにそのあと、午後はですね、体育館で高校生、中学生と一緒にバレーボールをされました。この頃は、生徒と一緒に随分と運動をされたんです。先ほどもお話ししましたが、44年、先生は41歳。学園に来ると必ず中学生、高校生を相手にですね、何かスポーツをされました。バレーボールもされてますし、一番多かったのはテニスですね。あと、卓球ですね。卓球を何回も「強い子出ておいで」とか仰ってですね、一緒になって、まさしくわれわれの目線に合わせてくださり、随分と一緒にスポーツをして頂きました。

その第2回入学式も、そういうようなスポーツが行われました。この時、非常に重要な提案が創立者からなされたんです。この日に開校1年間の学園の歩みを後世に残すために、校史を発刊してはどうか、という提案がなされたんです。学校の歴史ですね。創価大学では現在開学50年を一つの区切りとして、50年間の歩みをまとめるために『創価大学50年史』をつくろうという作業

が始まりましたが、学園の場合はわずか1年なんです。開学1年で、その1年の歴史を残そうということを創立者は提案されたんですね。これにはやはり驚きました。1年間でいいのかな。1年間の歴史って、本当に将来、歴史として残るのかな、と思いました。長い時から見れば、ほんのわずかな期間ですから。今思えば、本当に浅薄な発想でした。しかし、これは先生がご提案されて、その4日後の4月12日に、この学園の歩みを後世に残すための、校史の編集委員が決まりました。その決まった編集委員と一緒に、『新・人間革命』に書いてくださっていますけれど、

「彼は、生徒と教師の代表20人ほどを、都内のホテルに招き、中華料理をご馳走しながら、校史の打ち合わせを行った」(『新・人間革命』第12巻、378頁)。

これは、学校の校史をつくる編集委員、中学生5名、高校生5名、あと教員と校長、副校長ですね。この先生方を一緒に招いて下さいまして、ホテルでの夕食会になりました。実はこのホテルで中華料理をご馳走して頂いたメンバーに、私も入っておりまして、その時は全くこんなことになるのも思ってもいず、ただひたすらにホテルの豪華さと、出される食事の素晴らしさにですね、ただただそれに目がいってですね、先生がその時何を仰ったかは、ほとんど覚えていません。実は先生のお気持ちは、続けて書かれているようにですね、

「伸一が生徒たちとホテルで食事をしたのは、やがて世界の指導者に育つ鳳雛たちに、食事のマナーを教えておきたかったからである」(同上書、378頁)。

この親心を後から知るんですね。やはり子供というのは、だいたい親心を知らないですよ。大体何もわかっておりません。ここのホテルというのは「パレスホテル」なんです。皇居も近い、「銀座パレスホテル」に招待していただきました。中華料理のフルコースでした。なぜこのフルコースというのを覚えているかという、そこのシーンだけ、ずっと残ってるんです。私たち中学校のメンバーだけで一つのテーブルを囲っていたんですね。学園の先生が2人位いらっしやったのかな。だいたいですね、真ん中のテーブルが回る。そういうところで食べたことなどありませんから。中華料理というのはテーブルの真ん中が回るでしょ、あれ。あれが面白くてですね、なんだこれ、とか思いながらですね。出てくる食事がまた美味いんですね。

学園の食事というのは、またちょっと話がずれるんですけど、学園の食事というのは、給食がなかなかの給食でしてね。お腹が減っているのが、最大のご馳走とよく言いますが、お腹が減ってるから食べれるみたいな、そういう食事が結構あって、月に1回だけ「鉄火丼」が出るんですよ。もうこれだけが楽しみでね。ある時僕の友人がですね、まだ13歳ですよその頃は。子供ですよ、本当にまだ。ちょろちょろしているんですよ、学校の中を。知らないところがあるものだから、もう学校の授業の合い間をぬってですね、ちょろちょろ色々なところを探検しに歩くわけですよ。ある日の午後です。「大変だ、大変だ」と叫んで入ってくる人がいたんです。その友人があまりにも興奮しているので、「何が大変なんだ」と聞いたんですよ。そしたら彼は、「さっきさ、食堂の裏行ってすごいものを見つけちゃったんだよ」って言うんですね。「何見つけたんだよ」と聞

くと「僕たちが食べている給食のご飯って、あれ“最高級家畜米”だぜ」って言うんですよ。「何、家畜米」と皆んなでですね、「なんだそれっ」という話になりまして。よく聞いてみたら古々米なんです。いわゆる「古米」、「古々米」ってあるじゃないですか。古いお米。「古々米」だったんですよ。確かにご飯が温かいうちは、それなりに美味しいんですけど、冷めてくるとですね、だんだんだんだんお米が、白いお米じゃなくなってくるんですね。鉛色になるんですよ。僕ら「鉛飯」と呼んでたんですけど、鉛色のご飯になっていって、やはりそのお米が悪かったんですね。後でちょっと話しますが、なんでそういうことになったのか、ということは後でまた説明しますが。それで、あと覚えているのが「カレーライス」ですね。カレーライスって、ご飯にカレーかけてもらうでしょ。普通カレーというのは、とろとろしている。ところが、カレーのルーが、そのまま固まっちゃうわけですね。ご飯食べようと、4時間目の授業が終わって食堂に行く。そして、くだんのカレーライスを食べようと思って、すくったらですね、プリンのように、カレーライスのルーが「ぶるぶるっ」と。何かゼリー状のようにになっている。そのような食事なんですよ。

これはまた後日、僕らが社会人になってから学園の僕らの友人が、創立者と食事をしていただいた時に、創立者からあることを言われた。それは学園の給食のお話で、「本当に学園をつくるときにね、お金がなかったんだ。校舎をつくるのにもお金がかかった。先生方にもちゃんとした生活をして、教鞭をとってもらうためには、お金がかかったんだ。だからお金を削るところは、食費しかなかったんだ。本当に申し訳なかったな。ひもじい思いもさせたいだろうし、悲しい思いもさせたいだろう」とこうおっしゃってですね。食事会が終って一番最後にそう言われたらしいんですけど、その時は腹いっぱいご馳走になってですね、それで十分だったんですけど、「これで悪いけれど、他に何か食べていきなさい」といわれ、お小遣いを頂いたというんですね。ですから、その時にやはり創立者としては、本当に一人ひとりに、おなか一杯食べさせてやりたかった。それがずっと残っていらっしやったみたいで、僕らが社会人になってから、悪かったなって、その時の説明をして下さったんですね。確かによくよく大人になって考えてみると、本当に経費の節約で、節約できるところって、そういうところしかなかったんですよ。他のものは全然なかった。教育の中身、校舎。そういったものは削れませんからね。ですからそう考えてみたら、やはり僕たちはそういう先生の、温かい慈愛の中で育ってきたんだなと感じます。確かに食べるものはあまりいい物ではなかったけれど、ひもじい思いもしたけども、それがまた一つの財産になったんだなって、本当に思いました。寮生はもっと悲惨でした。僕は通学生でしたから、家に帰ると母親がいて作ってくれますけど、寮生はもう本当に朝、昼、晩、給食でしたからね。寮は夜食が出るんです。夜食と言っても、大した夜食じゃなくてですね、菓子パンなんですよ。6人一部屋なんですよ。菓子パン1個を夜食で食べるとですね、これが呼び水となってですね、お腹が減るんですよ。これはもう呼び水になっちゃうから、ちょっとやめようという提案が、どこかの部屋からなされたらしいって、後から聞いたんですけど。彼ら一体何を考えたかという、夜食でもらった菓子パンを6個積むんですね、真ん中に。じゃんけんをして勝った者が6個食べるっていうね。一人だけ幸せになればいいっていう、こういうことやって後の5人はひもじいまま

いるという。そういう工夫もしていたみたいです。今、考えれば面白い話ですよ。その当時は必死だったと思いますが。

ホテルに招待していただいた時も、寮生が目を丸くしましてね。こんなの初めて見たと言って。とにかく出てくる食事は次から次、次から次、とにかくおいしいんですよ。もう一流の中華料理ですから。マナーも、残さず食べるんだ、なんて学園の先生に言われて、残さず食べていったんですけれど、だんだん食事が続いていきまして、お腹がいっぱいになってきますよね。一番最後に来たのが、今でも覚えています。鯉を1匹丸揚げにして、おいしそうな餡がかかっているものが出てきました。これがメインディッシュなんですね。それが出てきたんですよ。出てきた頃、僕たちは、初めからずっと出てきている食事をガツガツ、ガツガツ食べていましたから、メインの食事が出てきたときには、もうすでに手がつけられない状態だったんですね、満腹で。その時に創立者がそれを見て、ゲラゲラ笑われて、「ほら見ろ。初めからガツガツ食べるから、そういうことになるんだ。おいしいものは後から出てくるんだよ」と教えて下さいましてね。その時の言葉がずっと残っていてましてね。おいしいものは後から出てくる、ということを理解していながらも、やはり初めに出てきたものを食べてしまうという習癖でまずいんですけど、そうしたこともこの時に教えて頂きました。この時初めて中学生として、そういうところに行ったので、ものすごく鮮明に覚えていますね。こういうことを代表メンバーを入れかえて、色々な時に先生がして下さいました。ある時は「帝国ホテル」へ連れて行って下さったり、ある時は一流のレストランなどに連れて行って頂きまして、そして教えて下さいました。これは王道学というんでしょうか、本当にどこに行っても恥ずかしくないような、そういう人をつくりたいという親心だったと思います。それも結局、少し経ってからじゃないと、僕たちはわからなかったわけなんですけれど、このようにして創立者から様々なことを教えて頂きました。

校史の『建設の1年』の編纂が、こういう形で昭和44年に始まりました。昭和44年5月つまり入学式が行われたその翌月の、5月11日のことなんですが、『聖教新聞』の記事に次のようにあります。

「創価学園の校史発刊へ」、「会長出席し、編さん委員会」。

こういう記事が載りました。この記事の中身は、

「創価学園では、このほど同学園の歩みを編さんして刊行することになり、創立者の池田会長が出席して、11日午後1時50分から初の編さん委員会を開いた。

編さんには諸富副校長以下6人の教諭と生徒の代表10人（高校生5人、中学生5人）があたるが、教師と生徒が一体となって校史をまとめることは人間教育の重要性が叫ばれているおり、きわめて画期的なことで、内外にその成果を宣揚するものと期待されている」。

これが5月12日付の『聖教新聞』に載った記事です。この頃、ちょうど毎月第二日曜日の午前中に、色々な幹部の方が集まって学会本部で勤行会が行われていたんですが、この勤行会に私た

ちも呼んで頂きまして、この勤行会が終った後、この編纂委員会になりました。1回目の編纂委員会の会合が終った後、会議室へ入れて頂きまして、そこでお昼ご飯をご馳走になりました。お昼ご飯は一体何かというと、ラーメンとたい焼きなんですね。本部の近くに「博文」というレストランがありまして、そのレストランからラーメンをとって下さいました。先生と一緒にラーメンすすって、そしてそのたい焼きがですね、もう本当に先生嬉しそうにおっしゃるんですね。「このたい焼きはね、四ツ谷で買ってきたんだ。これはしっぽまであんこが入っているんだ。しっぽまであんこが入っているたい焼き屋さんは、ここだけなんだよ。これがね、戸田先生がお好きでね、戸田先生と一緒に僕も食べたんだ」と。その時に本当に懐かしそうに、戸田先生との話を僕たちにして下さいました。先生の胸の中に、まだ戸田先生がいらっしやるんだなということが、子ども心にも伝わって参りました。そういうような編纂委員会でした。

4月8日に先生が校史を編纂しようとお提案頂いたんですが、提案の原因といいますか、要因といいますか、その源というのがどこにあるのか、ということは僕たちも知らなかったんですけども、つい10数年前に教えて頂いたんです。それは当時、国語の先生で永村先生という方がいらっしやいました。その後、関西の女子学園の学園長になった先生なんですけど、その永村先生からお聞きしたんですけども、先ほどころど開学1年目の夏休みに、中学生の宿題で、原稿用紙20枚以上の小説を書きなさい、というものが出されたという話をしましたが、その時に高校生にも同じ宿題が出ていたそうなんです。それで高校生も30枚から40枚の小説を書いてきなさい、と言って集めた。集めてみたら、意外に皆文章が書けると言うことがわかってきたんですね。その時、僕もさっきお話ししましたように、自分の父親のことを小説に書こうと思って、ずっと書いていた。これがですね、途中でものすごく楽しくなってきました。ただとにかく、ひたすら書いてました。原稿用紙が60枚になってしまいました。その僕が書いた小説を永村先生が見て、すごく驚かれたようなんですね。色々なところで色々な人に語ったらしく、僕の耳にも遠回りに、その話が入るようになりました。「君はすごくたくさん書いたんだってな」と、友達から言われたことも今になって振り返ってみると、思い出されます。どうもこれだけ書ける生徒がいるのだから、「学校の校史をつくっても大丈夫じゃないでしょうか」ということを、永村先生が創立者に御報告をしたようなんですね。それがきっかけになって、この校史をつくらうという話になったようなんです。僕も後から聞いて、びっくりしたのですけれども。どうもそういうような背景があって、「それでは歴史を残そう」ということになり、書ける生徒がいるのだったら、生徒も一緒に書こうということになって、先ほどの記事にあるような、教師と生徒が一体となって校史をつくるという話になりました。

中身の検討が始まったのですが、なにしろたった1年間の歴史ですから、何をとりあげようか。何を書こうかというので、いろいろ考えたのですが、一つは1年間に何をやってきたのかという、1年間の行事ですね。それと、もう一つは、自分たちの日常生活。朝から放課後まで、あるいは夜までの日常生活を分けて、1日の動きと1年の動き、というような形でまとめようではないか。それを10人で書くわけですから、1日の出来事の中から10の項目取り上げて、1年の行事のことを10項目取り上げて、それを書こうと。書いたのですが、これがなかなかうまくいかない。始終、

編集担当の先生からボツが出されます。僕は通学生でしたので、普通であれば家に帰らなくてはいけないのですが、ずっと学園に残ってその原稿を書き変えたり、推敲したりしていると8時、9時になってしまいます。そうすると、今度は寮に泊まっていきなさい、という話しになるんです。2学年しかいないですから、1学年分の寮の部屋があいていますよね。その寮の部屋を借りて、そこで皆んなで夜中、徹夜して書くというような日々が続きました。そうした毎日であるとなれば、どうなるかということは、だいたい想像つきますよね。昼間の授業の時間が、非常に眠いんですよ。もう本当に眠くてですね、先生の言っていることがわからない。ボーッとしてですね。そういう1学期が続きました。5月の時に創立者に第1回目の編纂委員会を開催して頂いたんですが、その次に同じように編集委員会を開いて頂きました。これも『聖教新聞』の記事ですが、見出しは、

「標題は『創価学園建設の一年』に決まる」。「会長を迎え 校史編集委員会」。

このように報道されています。昭和44年6月16日付けのものです。

「創価学園の校史編集委員会が15日午後1時前から、学会本部第3会議室で、創立者の池田会長を迎えて行われた。これには森田同学園理事長、小山内校長、編集委員である教諭、生徒らが出席。原稿作成を終えた段階で開かれたこの日の委員会では標題、装丁などを検討した」。

「原稿作成を終えた段階で」と『聖教新聞』の記事には書かれているんですけど、僕の自意識の中では、この段階で本当に終わっていたのかなという、疑問というか不安があります。その頃の、はっきりとした記憶がないんですね。とにかく、ひたすらもう4月から5月、6月にかけては徹夜で原稿を書いていた、という記憶しかありません。

「この結果、校史の標題は『創価学園建設の一年』と決まった。特に池田会長からは、内外から注目され期待を寄せられる創価学園の歩みをするすにふさわしい、権威あるものにしていこうことが望まれた」

と、記事には綴られています。この時も先生を囲んでお昼ご飯を食べながら、例のごとくラーメンとそれからたい焼きを頂きながら、種々議論を致しました。本当にこの時は幸せなことで、先生と一緒に月一回、中学生でご飯を一緒に食べさせていただいたんですね。これはもう二度とあり得ない話で、大事な思い出になっています。

昭和44年6月21日。先ほどの記事は、15日の会議のものでしたから、そのあとすぐですけども、6月23日付けの『聖教新聞』に

「会長、創価学園を視察」。

という見出しとともに、

「池田会長は21日夕、東京・小平市の創価学園を訪れ、グラウンドの整備状況を視察したほか、栄光第一・第二寮生らを激励した」。

という記事が載っております。これは本当に突然でした。編集会議が終わったばかりでしたから、もう僕たちも非常にびっくりしたんですね。それで、創立者が『建設の一年』をつくっていくプロセスで、何を、どのように考えていらっしまったのか。当時、僕たちはその真ただ中にいたわけですが、創立者の気持ちは全然わかりませんでした。ただ、呼んで頂いて、一緒に編集会議をやって頂いて嬉しい、嬉しい、で終わっていたんですが、その時の先生の思いは、一体どういうものだったのだろうか、ということなんですね。これについては池田先生が『新・人間革命』で書かれています。5月11日は、さきほどふれた「第一回編さん委員会」です。

「5月11日には、伸一が出席して、校史の第一回の編集会議が開かれた。20人ほどの会議であった。青年時代に、戸田城聖の経営する出版社で、少年雑誌の編集長を務めた彼は、この機会に、編集の在り方や醍醐味を教えたかった」（『新・人間革命』第12巻379頁）。

これが親心だったんですね。先生は20代の前半に、皆さんご存じのように、戸田先生の出版社である「日本正学館」という出版社で『少年日本』という本を編集されていました。原稿が集まらなないと、ご自分でもその原稿を書かれてですね。ペスタロッチ、ジェンナー。こういう偉人を取り上げて、先生は書かれています。処女作はペスタロッチです。なぜ先生が若き日の時代に、ペスタロッチという教育者を取り上げたのか。なぜペスタロッチだったのか。これも本当は研究の対象なんですね。これにつきましては、現在、創価教育研究所に伊藤貴雄さんという准教授がありますが、この方が一生懸命研究されています。先生の文章を一つ一つ分解するかのようにして検討を重ねられていますので、もうちょっと経ったら、なぜ先生がペスタロッチを書くという気持ちに至ったのかということが、よりクリアになっていくと思います。さて、創立者は色々な編集をしたこと、編集で培ったもの、楽しさ、そういうものを生徒たちに伝えたかった。このことが、『新・人間革命』を読んで初めて伝わって参りました。

「語らいは弾んだ。生徒の質問を受けながら、伸一の話は、文学や読書にも及んだ。それは、創立者の楽しき“特別講座”の観を呈していた」（同上書、379頁）。

考えてみればその通りです。とにかく先生が、楽しそうに笑いながらですね、高校生の先輩たちと話をしたり、そういうやり取りを僕たちは、そこの現場にいて見させていただきました。非常に楽しい楽しい一時だったということだけが、記憶に残っています。本当にこれは先生の親心ですね。

「校史には、伸一も『発刊によせる』を寄稿することになった。

6月15日に行われた編集会議にも、伸一は顔を出した。この時、校史のタイトルが『創価学園 建設の一年』と、決定したのである。

それから6日後の21日にも、突然、伸一は学園を訪れた。そして、校史の校正作業にあたるメンバーの作業室をのぞき、ともにゲラを見ながら、校正の力を培うことの大切さを語ったのである」(同上書、380頁)。

こう書かれていますけれど、これは本当に覚えてます、明確に。僕たちが一生懸命、校正作業、昔、活版ですから、間違った文字を直す。ひっくり返った文字を元に戻す。赤鉛筆で、その間違いを直すための記号をゲラに書き込む作業をやっていたんです。そしたら突然、創立者が入って来られてですね、「おっ、やってるね」とおっしゃって、それで「この校正作業というのは、実は一番地味な作業なんだよ。一番地味な作業なんだけれども、この作業をやっておけば、必ず君たちの将来に役に立つ時があるんだ。これは今、君たちが財産をつくっているのと同じことなんだ」とおっしゃったんです。なぜそんなことおっしゃるんだろうって、その時全然わかりませんでした。でも確かにずっと大人になって例えば今、僕は大学でこうやって教鞭をとっています。自分で論文も書きます。例えば色々なものに、投稿を致します。その時に校正をしなくてははいけませんよね。ワープロで打とうが、電子文字で打とうが、やはり校正はしなくてはならないんですが、それが全然苦にならないんですよ。他の先生方に聞くと、こんな無駄な作業はない、というようなことをおっしゃる方もいるんですが、全然苦にならない。それでほとんどの校正の記号も覚えています。中学生の頃の記憶っていうのは大したものですね。一生忘れないくらいのそれが入っているんですね。ですから、その校正作業は全然苦にならないし、そういうことに喜びを感じている自分を発見すると、「あの時先生がおっしゃっていたことが、こういうことなんだな」ということを、しみじみ感じることができます。

その時、もう一つ先生がおっしゃっていたのは、「印刷所はどこ？」と聞かれたんですね。「印刷会社はどこでやってるの?」。『建設の一年』の印刷会社の名前を聞かれたんです。この時の印刷所は「明和印刷」という会社でした。ですから僕たちも自然に「明和印刷でやってもらっています」と、先生にお答えしました。先生はものすごい満面の笑みを浮かべて「おっ、すごいじゃないか。一流の会社だよ、一流の印刷会社だ。御書もそこでやってもらったんだ。なんでも一流のところにやってもらうのがいいんだよ」とおっしゃった。そこでも先生が、王道学を教えて下さっているわけですね。ですから今になって考えてみますと、色々な場面、色々な状況があるんですが、そのなかで先生が一貫して教えて下さったのは、とにかく一番いいもの、一流のものに触れて、そしてそれをきちっと覚えていきなさい。それをきちっと身につけていきなさい。そういうことをずっとおっしゃっている。今になってみると、そのように思えてなりません。ですから、何かやろうとするときに、何が一番良い方法なのか、何が一番プラスになるんだろうと、自分なりに考える。そういう癖ができました。創立者が望んでおられたものの一つが、こうしたことなのかなと、後から振り返ってみると思います。

昭和44年7月17日に「第2回栄光祭」が開かれました。この「第2回栄光祭」からは、ただ単に寮生だけのお祭りではなくて、通学生、下宿生を含めた、そういったお祭りに変わっていききました。ですから、これは学園の中の大きな行事の一つになっていきました。ちょうどその昭和44

年7月17日、この前日には、皆さんご存じのように、アメリカの宇宙船「アポロ11号」が、人類初の月面着陸を目指して、宇宙に飛び出していった年です。ご記憶にあると思いますが、アームストロング船長が初めて月に降り立って、「これは人間としては、小さな一歩だが、人類にとっては、大きな一歩である」という名言を残しましたが、ちょうどあの時期にこの「第2回栄光祭」が開かれました。この日に『創価学園 建設の一年』が完成を致しました。これが初めての学園の校史ですね。この完成した『創価学園 建設の一年』の表紙を開きますと中扉に、創立者ご自身が「創価学園 建設の一年」というタイトルを書いて下さっています。直筆文字を、そのまま中扉で使わせて頂きました。この時期、創立者が書かれたペンの字を、そのまま印刷をしたというのは、もしかすると初めてかもしれません。それまで僕たちはそういうものを一切見たことがありませんので、初めてこの本の中で先生にして頂いたご配慮だったと思います。

話を少し進めますと、2年目に『建設の二年』ができるんです。3年目に『建設の三年』というように、校史が1年ごとに作られていきましたが、中扉に創立者の直筆文字で書いて頂いたのは、この本が最初で最後なんです。

『建設の一年』の一番最後に、ソノシートに学園の寮歌が吹き込まれているのがついているんですよ。だから当時、学園の寮歌がいかに貴重であったか、ということの一つの表れですね。ただ、今は残念ながら、このようなソノシートをかける道具が、なかなか手に入りません。けれどもこうした事から考えてみますと、ちょうど1年目から2年目にかけての一つの大きな画期が、この本を作るということだったと思います。1年の歴史を残すのはどういう意味があるんだろうと、僕はその時わからなくて、とにかく言われるままに作ったんですが、今こうやって40年経ってみると、その時の1年間の記録が残っていることは、非常に重要です。僕自身は、歴史を勉強していますが、歴史を勉強している者からすると、こんなに素晴らしい資料はありません。科学的資料ですよ。その当時、見たことや感じたことが、そのまま書かれているのですから。これは事実としては有難いもので、今になって思い出して書けと言われたら、もっとかつこよく書くと思うんですよ。でもこれを見るとその時の感情がですね、ものすごく赤裸々に綴られていてですね。ちょっと自分の書いた文章が、気恥ずかしいんですけども。これは残っていてとても貴重な、自分にとっても、大切な思い出になってます。

さて、『創価学園 建設の一年』の中の「発刊によせる」で創立者は、何を学園生に望まれていたのかということです。「発刊によせる」は、わずか2ページなんです。わずか2ページで見開きの形態をとっています。この見開き2ページに凝縮する形で、創立者は書かれているんです。そこで、学園生、当時の中学生、高校生に何を望まれたのか。こういうふうに先生は書かれているんですね。

「今、世界のあらゆる国で、学園を舞台に破壊の嵐が吹き荒んでいる。

諸君たちはその中で、ただ一つ

未来二十一世紀への建設の息吹を湛えた、希望の灯火なのだ」

とこういうふうに言われました。44年と言いますと、ちょうど学園紛争、大学紛争の真ただ中で、日本の大学史上、初めて国立大学での入学試験ができなかった。東大の入学試験ができなかった年です。全世界的にこのスチューデントパワーという、学生たちが騒ぎ、それがだんだんと高校にまで飛び火していく。そういう時期でした。その中で先生が、「今、世界のあらゆる国で、学園を舞台に破壊の嵐が吹き荒んでいる。諸君たちはその中で、ただ一つ未来二十一世紀への建設の息吹を湛えた、希望の灯火なのだ」。こう言って下さったのが、非常に印象に残りました。さらに、直接的に、

「私が諸君たちに願うことは、
権力者になることでもなければ、金持ちになることでもない。
人間として、正しい、輝く生命の当体を
確立しきっていただきたい、
ということである」

と書かれています。ですから単に、世間的な名誉や地位を獲得するだけの人生であってはならないのだ。もっと大事なものが他にあるんだということを、切々と先生はこの文章の中で訴えた。そしてこの本の中の、一番最初のところに残して下さったわけです。ここで語られていることは、高校生、中学生に向かって語られていることなんです、無論、大学生にとっても非常に重要な一つの方向性を示して下さっているというふうに思います。ですからここでの一節というのは、おそらく「金太郎飴」ではないですけど、先生が色々な言い方をして、色々な説明をしてくださっていますが、これが若き未来を担う生徒や学生に対しての先生の願いだということがわかって参ります。

それからもう一つ、この「第2回栄光祭」での創立者の提案というのがございました。それはいわゆる「2001年7月17日の誓い」というものです。先生は、こういうふうにおっしゃいました。

「二十一世紀の初めには、この1期生、2期生から、社長や重役、ジャーナリスト、あるいは、科学者、芸術家、医師など、あらゆる世界で、立派に活躍する人がたくさん出ていると、私は信じます。また、ある人は、庶民の指導者として、地味ではあるが、輝く人生を生きているかもしれない」(『新・人間革命』第12巻、384頁)

こういうお話をされました。このお話の時、21世紀はまだまだ遠いと思っていました。21世紀、これは昭和44年のことですから、1969年なんです。あと30年先です。30年先。30年先のことを中学生、高校生に語るわけですね。その時、先生は40歳です。21世紀になると私は70歳になっていて、今の僕の年齢に君たちになる頃なんだよ。僕の年齢になる頃に新しい世紀が来るじゃないか。それが君たちの世紀なんだ。そういう論調なんです、先生のお話は。僕たちも21世紀って、いつ来るんだろう。どの段階で来るんだろうって、その時、本当に正直思いました。自分の30年先なんて想像もつきません。高校生にはついたかもしれない。でも中学生はよくわからない。まだ14歳ですから。30年先ですよ。全然わからないですね。だって自分たちの学校の先生だって、

40代の先生なんていなかったのですから。校長先生だけですよ、40代の先生って。えっ、校長先生みたいになるの、みたいな感じで、そういう批判的な冷やかな目しかなくてですね、全然わからなかったです。でもそれに対してポーンと未来の夢を与えて下さるんですね。そしてこういうふうに言われました。

「その二十一世紀に入った2001年7月17日に、ここにいる先生方と、千人の先駆の創価学園生全員が、集い合おうではないか」（同上書、384-385頁）。

この提案があって私たちは、この2001年の7月17日が、これが40代に至るまでの、どちらかという一番大変な、一番いろいろ苦労が伴う年齢という、すごく語弊がありますが、社会に出てから一番揉まれる段階の、その夢になっていったわけですよ。7月17日にやはり自分できっちと夢を見つけて、その夢を果たした姿で、集い合いたい。友達ともここで、同じように健闘を称え合いたい。これが中学の1期、2期、当時草創の学園で同じ釜の飯を食った仲間たちとの誓いだったんですね。もう本当に待ち遠しかったですし、なんとかその段階までに、自分なりに一つの結果を出さなきゃいけない。そういう気持ちもありました。だから半分焦りもあったし、一つの大きな目標でもあった。こういう目標を先生が与えて下さったんですね。

話がちょっとこの段階で飛びますけれども、この2001年7月17日の集いというのは、この当日にはできなかったんです。2001年9月に皆、集まりました。それも全学園卒業生が集まったんです。もうすごい数でした。その中では、当然先生がおっしゃっているような社長、重役もおりました。ジャーナリストもいた。科学者もいました。芸術家もいました。お医者さんもたくさんいました。僕らの仲間でも、お医者さんになっているメンバーがたくさんいます。実を言うと、今、創価大学に「保健センター」というところがあります。ここは、学生や教職員の健康管理をしてくれるところなんです、そこの主任医師というのがおりまして、この主任医師が中学校1期の卒業生です。僕らと同級生の根本君というひとです。この根本先生がいてくれて、今インフルエンザで非常にお忙しいようですが、とても真面目な方で、非常に一生懸命やっています。それから当然、政治家も出たわけですよ。皆さんご存知の北側一雄さんは、高校の1期生です。参議院議員の木庭健太郎さんも、高校1期の先輩ですよ。こういう先輩たちがいるわけですから、この時の創立者のお話があって、このお話を嘘にしちゃいけない。嘘にするのか、正しくするのかというのは、すべからく自分たちにかかっているんだ、という自覚はありました。だからそこで頑張れた。創立者が言われたことをどうするのか。これはすべからく、自分たちの聞き方、生き様に関わっているのだな、と思いました。だからすごく重かった。非常に重い使命でした。でもそれを何とかやろうと思いました。だからと言って、すぐさま自分を変えることもできない。それでも、ただひたすら先生が待っていて下さるということが嬉しかった。そうした意味で、ただひたすら先生が示して下さいた道を歩んできた、ということを実感しております。

それでこの「第2回栄光祭」が終って、その次の月、8月30日ですから、夏休みが終わりかけ

た頃だったんです。僕たち『建設の一年』の編集委員だったメンバーが、校長先生に呼ばれました。それは創立者が、高校、中学の編集委員10名の一人ひとりにですね、直筆で箴言を書いて下ったというのです。一人ひとりに本当に丁寧に、一人ひとり全部違う内容でした。

その時の編集委員が誰だったのかというと、中学生では、まず寺西さんですね。この人は北海道出身で、さきほども話しに出ましたが、創価大学の国際部長を務めて、現在副学長補、経済学部教授として一緒にやっています。ですから寺西さんと僕は、13歳の頃からずっと一緒なんですね。寺西さんは北海道出身ですから、自分の親と一緒にいる時間より、僕と一緒にいる時間の方が長いんですね。僕も親といる時間よりも長いんで、寺西さんと一緒にいるのが一番楽です。お互いに何も語らず分かり合えるということで、その意味では非常に楽な方ですけども。

次は岡本忠利君。今、愛知県豊田市役所勤務です。中学在学中に病気になりまして。ひどい病気で、血液の一種のガンになりまして、それで本当に僕に残念だったのですが、中学校だけで学園をやめて、高校は愛知県の地元の高校に行きました。自分もそれだけ病気になったものだから、医者を目指していたのですが、体の調子もあって勉強もできなかったようです。それでも名古屋大学に入り、今、豊田市役所で元気に活躍をしております。時々、電話で話をしますが健康が元に戻って、それだけでも本当に良かったと思っています。

それから多賀雄司君。さきほども話しましたが、日本橋の天才の人。それから私と小山内君。小山内君は校長先生の息子さんで、長男ですが、現在、国家公務員として活躍しています。海上保安庁で一生懸命仕事をしている人ですね。一人ひとりに創立者は、いろんな形で激励をしてくださいました。

高校の先輩たちの紹介もしておかないと後で、「お前、高校生ははずしただろう」と絶対先輩たちから言われるので。先輩たちの性格よくわかっていますので紹介しておきます。高校の先輩たちの編集委員というのは、田代さん。本学の理事長です。羽吹さん。ご存じのようにSUAの学長。忍田和彦さん。この人は今、創価学会本部の重要な役職を勤められている方。小倉裕児さん。先ほど紹介致しました、「草木は萌ゆる」の作者。高橋久朗さんは、創価大学を卒業され、普通の会社に勤めておられます。この10名だったんですね。

その時に私が頂いた箴言というのは、

「母校の先生を生涯大切に
いずこの学園より誇り高きと」

こういう箴言を頂きました。これを僕はやっていかなければいけないんだと、自分では心に秘めてここまで歩んできたわけで、やはり母校の先生と母校を愛し、母校を大切にしていこう。生涯大切にしていこうことが自分の仕事なんだ。「いずこの学園より誇り高きと」。こういう言葉を頂きました。この言葉もあったので、今日も勇気を持って、自分の学園時代の話を見せて頂いているということになるんですが、本来であればちょっと恥ずかしいですよ。やはり自分としても、自分の学校時代の話をするのは。しかし、創立者から頂いた言葉が残っている限り、私たちは、

皆さんにお話をしなくてはいけないな、というように自分で思い、今日も「清水の舞台から飛び降りる」気持で、恥ずかしながら話をさせて頂いております。色々な会合に行くと、体験発表を聞きたいと言われるんですけど、体験発表は一番、自分としてはこそばゆいんですよね。なんだか自慢話になったり、自分の苦勞話になったりして、ちょっと得意じゃないんですけども。だんだんそうもいかないという話しになってきて、今日の事態です。

最終的なまとめになってしまいましたが、創価教育というのは一体何か、ということで、一番初めの問題定義にもどりますが、来年いよいよ牧口先生が『創価教育学体系』を書かれて80周年。

「創価教育学会」が発足して80周年。非常に大きな節目になる年です。その時に、やはりこれだけ教育の実践の場があって、特に創価大学では、私たちが所属している「創価教育研究所」という研究所があり、ここで池田先生の研究、戸田先生の研究、牧口先生の研究を進めています。その中で、この「創価教育というのは一体何であったのか」ということを研究しなければいけない。それが一つのきっかけになっています。そして今日の目的の一つである、「創価教育とは何か」ということのための一歩前進の、その一つのまとめとして、先生の掲げられている『新・人間革命』のなかで書かれていることに注目してみたい。僕がこの問題に対して、「こういうことなんだ」と感じたところを抽出してみました。その話を最後にさせて頂きたいと思います。

「山本伸一は、生徒の幸福と栄光の未来を考え、一人ひとりを大切に作る心こそが、創価教育の原点であり、精神であると考えていた」（『新・人間革命』第12巻、395頁）

つまり、一人ひとりを大切に作る心ということなんですね。ここにどうも「創価教育の原点」があるということになります。そして、つづけてこのように述べられています。

「国家のための教育でもない。企業のための教育でもない。教団のための教育でもない。本人自身の、そして社会の、自他ともの幸福と、人類の平和のための教育こそ、創価教育の目的である」（同上書、395頁）

と言われるんですね。国家のためでもない。企業のためでもない。教団のためでもない先生は言いきられているわけです。それは本人自身の、そして社会の、自他ともの幸福と、人類の平和のための教育。それが創価教育の目的だ、ということなんですね。大事なのはこの部分だろうと思います。「教育は一体何のためなのか」というと、一人の人間のためのものなんだというところに、創価教育の原点があるんですね。自分たちの仲間と、特に創価大学に残っている創価学園の出身者、創価大学の出身者と時々議論をするんですね。これは学園も、そして大学もそうなんです。池田先生は、何のために大学をつくったんだろう、とずっと思っていたわけですよ。だから、例えば一番端的な例として、「教団のためにつくったんだ」という批判が社会では多いです。僕もよく言われました。僕が通っている時も小学校に挨拶に行った時に、小学校の先生から言われました。「君の通っている創価中学、創価高校というのは、創価学会の幹部をつくる学校なんだろう、坊主をつくる学校なんだろう」とよく批判されました。「そんなことないですよ。一切、宗

教教育やっていませんよ」と答えるとびっくりされて。こうしたことは、未だに続いているわけですよ。世間ではそういうふうにはしか見えないんですね。ところがよく考えてみると、通常の教団が持っている教育機関であれば、例えば学問を教える際にですね、何を教えるのかというと、「教団の教えこそが絶対無二」である、という教え方をするんですよ。宗教なんだから。全く疑うことを許されずに、そのことを信じることなんですよ。そしてそれを信じるために、絶対に正しいということを証明するためのロジックを考える。これは神学等に象徴される、キリスト教などの話ですよ。だから『聖書』がいかにか正しいかということ、どのようにして裏付けるのか、という勉強なわけですよ。

ところが、そうした教育を一切やらないで、学問だけをやるということになる、一体、そこで何が起こって来るか。学問というのは、すべからく疑うことからしか始まりません。僕らが勉強してる時に何をするのかというと、ここで語られているのは正しいのか。ここで言われていることは、事実なのだろうか。今まで、このような通説があったけれど、これで良いのだろうか、と疑うことから始まるわけですよ。それを考えますと、そのことを創立者が勧めているんですよ。「学問をしなさい」とおっしゃっているわけですから。ここは全く今までの宗教の、いわゆるリーダーといいますか、教団とは違う考え方があるのだろうと、いつも議論しています。本当に自分たちの教団だけを守ろうと思ったら、そのようなことは言わないはずですよ。疑え、ということはある得ない。宗教ではね。これは哲学と宗教の違いなわけですけども。そういうことがある。そして、「たくさん本を読みなさい。日本の西洋の、色々な本を読みなさい」と仰っています。「プラトンを読みなさい」とおっしゃりもするし、「色々な哲学の書を読みなさい」とも。そこにはすべからく、色々なことを疑って、その中から真実を見つけ出すのだ、真理を見出すことが学問だ、ということになります。どうもこの社会の批判といいますか、一番簡単な批判ですけども、「創価大学、創価学園というのは、創価学会のための教育機関じゃないのか」という批判は、全くあたらないです。ですから僕たちは色々なことを言われますけれども、その人たちに対していつも言っています。「学問は疑うところからしか始まらないでしょう。そういうことを勧めているんですよ、本学では」と。その意味でさらに言うならば、「教育とは一個の人間のためにあるのだ。教育こそが、その人間を決めるのだ」という言い方もありますが、一人ひとりのために教育があるということはすごい。この信念といいますか、これこそが創価大学の中核である。最も原点である。そして目標でもある。これがおそらく「創価教育の目的」ということになるだろうと思います。

創価教育の実践の場としての創価学園の歴史は、今ここにあるということで、これからも語り継がれていかなければなりません。それはどのように語り継がれていくかと言うと、一人ひとりの生徒がどうやって成長して、どういふような大人になって、どういふふう生きていったのか。一人ひとりの人生を語らなければいけないと思う。それは、社会の中で社長や重役というように、偉くなっていく人もいるし、さっきちょっとご紹介しましたがけれども、両国橋のたもとで泥鰌と鰻を売る商売をやっている、そういう友もいるわけです。だけど彼は、ものすごく自信に溢れて仕事をしてくれているわけです。僕たちは彼のところに行ってそれを食べることで、ものすごく

幸せを感じる。彼もそれで、自分から色々なことを皆んなに伝えているんです。素晴らしい人生だと思います。そういう、一人ひとりの歴史を語り継がなくてはいけないのだらうなと思います。

ここでちょっと最近の出来事をご紹介しますが、よく創立者がキャンパスの中を車で回られているという話しです。本当に時間を見つけては、創立者がキャンパスの中を車で回って下さって、それで出会う学生を激励して下さっているんです。これは今年に入ってから、何回もありました。夏休みもありました。それで学生に会うと、どういう激励をされているのかというと、先程も話しましたように、「お父さん、お母さんを大事にね」「お父さん、お母さんによろしくね」という話を必ずされます。それを聞いた学生はすぐそこで、携帯電話で、ものすごい素早い親指の動きで打って、お父さん、お母さんのところにメールを送るわけですよ。そうすると、送られたお父さん、お母さんは、またそこですごく喜ばれるんですね。もうその夜の地域は、すごく盛り上がるという話ですけども。その一例なんですが、僕の教え子の一人です。函館から出てきたゼミ生で、母一人、子一人なんです。お母さんも本当に苦勞されて、それで創価大学に送り出してくれたんですね。ところがね、親の心、子知らずで、彼は一体何をしてきたのかというと、4年間ずっと野球をやっていたんです。準公式野球部です。軟球よりも硬くて、硬球よりも柔かい球を使います。4年間ずっとやっていたんです。ところが4年間経って、はっと気づいたんでしょうね。自分は勉強したいって。勉強しなきゃダメだって。そもそも彼は、高校の先生になりたいというのが夢だったんです。高校の先生になりたいというのが夢で、それで野球をやっていたから、高校に行けば、野球の指導もできるし、高校の先生になりたい。そのようなことを、ずっと思っていたんですね。この彼が突然、「大学院に行きたい」と言い出したんです。「君は4年間、勉強もしていないのに大学院に行くなんて、無理だと思うよ。今の状況では絶対無理だ」と僕は言ったんですね。ですが、本人は「やります」と言てきかないものですから、「自分で決めたのなら、やってみればいい」という、突き放す言い方をしていました。結局、受験したんです。案の定1年目はダメで、落ちました。そりゃそうですよ。勉強してないんだから。野球しかしてないんだから。大学院の入学試験が野球だったら余裕で通りますけども、そうはいかない。ところが本人は頑張ってもう1年勉強して、1年浪人をして大学院に入りました。一生懸命勉強を始めましたよ。やはり真剣でした。ところが修士課程ですから、2年間で修士論文を書かなければいけません。修士論文を書こうとしたんだけど、またこれがなかなか上手くまとまらなくて、2年目に出せずに、もう1年延びてしまいました。「お母さん、何て言っているの？」と聞きましたらば、「自分がやろうとしたのだから、頑張りなさい、と言っています」と言うんですね。

その3年目に修士論文を書こうと一生懸命苦勞をしている時に、ちょうど彼がキャンパスを歩いていたら、先生の、どうも創立者の車が止まっている。キャンパスで。止まっているけれども、先生の車かなと思って、彼は車に近寄って行った。そしたら後ろのウィンドウがスーッと下りていって、見たら池田先生だった。そうしたら、もう彼はパニックになりましてね。もう頭、真っ白、パニック状態。大学院生ですよ、学部生じゃないんですよ。大学卒業しているんですよ。普通、創立者にお目にかかったならば、例えば「いつも先生、有難うございます」とか、せめて「先生、こんにちは」とか言うのが礼儀でしょう。彼は何と言ったかというね、「どうも」って言っ

たんですよ。先生に対して、「どうも」って元気いっぱい言ったそうです。それに対して創立者がなんと答えたか。彼の眼をじっと見て「どうも」と返して下さったと言うんです。それで彼が研究室に来て僕に、「今日創立者にお会いしたんですけれども」と言うんですよ。見たら元気がない。

「なんだ、先生にお会いしたんだったら、もっと元気でもいいんじゃないのかい」と言ったんです。「いや創立者にお会いした時に、どうも、としか言えなかったんです」と、シュンとしているんですね。「どうしましょう」と言うんですよ。「どうしましょうもくそもないだろう。もうやっちゃったんだもん、しょうがないじゃないか。せめて出来ることは、お詫びの手紙でも書くことかな」と言ったんです。そうしたらその大学院生は「そうですね、お詫びの手紙というのはありますね」と言ってですね、喜びながら帰っていきました。3日後やって来まして、「先生、今日創立者のところに、お手紙を出して来ました」。「そうか、何て書いたんだ?」。「『創立者にお会いした時に、どうも、としか言えなくて、どうもすみません』と書きました」と。「君は『どうも』ばかりだな」というようなことがありました。

この人がその時から本当に頑張ったんですね。先生とお会いしたことが一つのきっかけになって、修士論文を3年目にして仕上げました。素晴らしい修士論文でした。卒業式の時に経済学研究科を代表して、学位記を授与されました。お母さんも、非常に喜んでおられました。そしてその4月に、3月に卒業ですからね、その4月にどういうわけか偶然ですけども、創価高校で地歴科の非常勤の先生を探している、ということを知りました。それで彼を推薦しましたら、運良く非常勤で創価学園の教鞭をとるようになりました。彼は1年間、非常勤の講師を続けていたんです。夏になって東京都の教員採用試験を受けました。ダメだったんです。それも11月位になって僕のところにやってきて、「どうだったんだ?」と聞いたら、「ダメでした」と言うんです。「ダメって君、それだったらもっと早く言いに来ればいいのに」と少し怒ったんですけど。なぜ怒ったのかというと、ちょうど僕の研究室で去年、現役の4年生が東京都の中学校の教員に受かりました。現役合格は、素晴らしいことなんです。僕の研究室では十数年ぶりです。それから、もう一人が神奈川県小学校の教員に現役で受かりました。現役で受かった人たちは、この11月、12月になりますと、どこの学校に赴任をするのかが決まってくるんですね。だからその学生たちが僕の所に来て相談するのは、「島に行くのはどうですか。それとも都内の下町がいいですか。あるいは山の手がいいのでしょうか。どこ選んだらいいですか?」といったことを、きちんと相談しに来る時なものですから、彼が落ちたって言いに来た時には、「現役でも、中学校、受かっているんだよ。君は、創価高校で半年間、教鞭をとっているのに何をしてきたんだ」と少し厳しめに申しました。そうしたら、12月になって、本当に暮れも近くなってきた時に、彼がまた研究室にやって来たんです。このときの彼は、ものすごくきりっとしていました。きりっとしていたんですが、どこか半分困惑しているような顔で、なにを言いにきたのかと言うと、「先生実は、創価高校から正式な教員にならないかという話を頂いたんです」。

それで彼は、今年の4月から創価高校の地歴科の教員、正式な教員として教鞭をとるようになりました。僕もすごく驚きました。もしも採用試験に受かっていたら、これは12月の段階で、どこか自分の赴任校を決めなければならないわけですから。赴任校とか地域が決まって、校長先生

と教育委員会にそれを登録してしまったならば、その段階で学園からお話があっても、それを受けることは無理だったと思います。学校の関係から言って、教育委員会との関係から言って、受かって赴任校も決まて行かないというのは、困りますからね。だから、彼が試験に落ちたということは、それなりの意味があったのだろうなと思いました。その彼が本当に今、学園で生徒たちと一緒に勉強してくれています。今度は僕が教えてもらった学園に、自分の教え子が教師になっていて、それで今の学園生を教えているということ。これは言うに言われぬ喜びがあります。自分が行って教えるよりも、もっと嬉しいです。初めて自分の教え子がこうなっていったんだってことをですね、歳をとったんだなっていう感慨もあるんですが、そういう自分の教え子が一人、またそういう形で自分の一つの夢を叶えてくれたんだなということが、すごく嬉しいです。それを考えるにつけ、創立者に本当にもっともっと喜んで頂きたいなと、しみじみ思うんですね。そういうように、自分がうまくいけば喜んでくれる人がいる。自分が幸せになれば本当に喜んでくれる人がいるというのは、これは最高の教育ですよ。だからこそ自分がそこから何か新しいものを見出そうとするわけで、そういうことを考えますと、まさに創価教育は、一人ひとりのための教育なんだということが、しみじみわかってきます。その意味でも実践の場としての創価学園の歴史、創価学園で行われていることは、これから語り継がなければいけないし、創価大学で今、何がなされているのかということも、きちっと説明をしなきゃいけないんだろうなと思います。

創価教育とは何か。僕たち教員自身がですね、一人ひとりが創価教育とは何かを問い続けなければならない。一人ひとりの人間の成長を願うことが一つである。そしてその先に何をすればいいのだろう。それをずっと考えながら実践をしていくことが、今、非常に重要なんだと思っています。特に自分自身で今日お話をきて、今日お話をするために自分で色々な勉強をしてみて、最終的にわかってきたことは、創価教育の特色。それは、教員と学生、生徒が共に築いていくところにあるのだ、と思います。一方的に教師が何かを教える。これはやはり教育ではない。こっちが教えて、そして生徒や学生が何か反応し、そしてその生徒と教師の間でのやりとりで初めて成り立つのが教育なんだと、本当にしみじみ思います。卒業して、40年近くも経つわけですが、未だに僕たち同級生が会って、色々な話をします。10年会わなくても、15年会わなくても、昔と同じような話ができるんです。創価教育の宝は、その意味でも、一つは仲間だ。同窓の友である。これは間違いなく言えるのではないかなと思います。他の大学に行った人たちに聞くと、そういうような仲間はいいないというのがほとんどなんですね。研究者仲間でも聞いてみると、そんな中学、高校の仲間とずっと一緒にいるなんてことはあり得ない。こう言うんですね。それはその通りだと思います。そういうことも含めて、教員と学生が共に築いていく。そしてその学生たちが本当に仲良く、一つのところを目指して進んでいく。ここに創価教育の特色がある。また、そういうことを伝えることが、僕たちの最大の仕事なんだろうなというように、今は思っています。

今日は、昭和44年までの歴史についてしかお話ができませんでした。先どりして言いますと、昭和44年、中学2年生の時の夏に臨海学校があったときほど言いましたけれども、林間学校も

開催されているんですね。臨海学校と林間学校ができて、この林間学校というのは箱根の研修道場をお借りしてやったんです。僕は、中学2年生の時に林間学校に参加をさせて頂きました。その時にも、先生はその林間学校に来て下さいました。その時にいろいろなやりとりがありましてですね。ちょっと先どりした話かもしれませんが、一言だけ。

僕たち中学生でしょ。部屋が広くてですね。なんで子供は広いところに行くと走り回るのですかね。僕らも、ワーツと走りました。そうしたら、庭に面した窓が開いて、「何やっているの」と声がしたんです。見たら、先生なんですよ。先生がいらっしゃってですね、あっ先生だって、全然緊張感がないんですね。「先生、先生」という感じでですね、僕ら子供がワーツと寄っていくわけですね。そしたら、「皆んな出て来なさい」と、窓のところに顔出せとおっしゃってですね。すぐそばに池があるんです。「今からここの池の魚を取って見せるから」と言うんです。「先生どうやって取るんですか？」と聞いたら、すぐそばに、虫を捕る網があったんですね。蟬を捕るような網が。それを先生は突然取ってですね、それを池の中に突っ込まれたのです。そして、すごいいきおいで引っかきまわされました。むきになって。驚いて見ていたら、結局捕まらなかったんです。先生が、「ここにいる魚はね、芦ノ湖にいる魚でね、^{はや}鮪というんだ。だから速いんだ」。シャレなんでしょうね。「速いんだ。捕まらないんだよ。魚だってね、生きることに大変なんだ」といわれて、網を投げ出して、そのままさっさと去って行ってしまった。こういう事件がありましてね。先生、取れなかったんだ。中学生の時に、そういうようなやり取りがありまして、他にも色々なやりとりがあったのですが、林間学校で先生は様々なことを教えて下さいまして、その時の話を、昭和44・45年の時の話を、また明年、出来れば良いなと思っています。

本当に今回は、最後までいこうと思っていたんですけど、私の創価大学への入学までなどとはとんでもないことで、なんのことはない。創価学園の開学から1.5年ですよ。まだあと4年半分の話をしないと、大学の話しまで行きつかない。本当に申し訳ございません。本日は本当に有難うございました。以上で終わらせて頂きます。